

# 野 畑 春 日 町 遺 跡

— 第 1 次 調査 報告 書 —

1987年 3月

野 畑 春 日 町 遺 跡 発 掘 調 査 団

# 野 畑 春 日 町 遺 跡

— 第 1 次 調査 報 告 書 —

1987年3月

野畠春日町遺跡発掘調査団



有舌尖頭器（原寸）

## 序 文

大阪府の北部に位置する農中市は、千里丘陵と、猪名川によって形成された西摂平野の接するところにあるため、比較的变化に富む地勢を呈しています。そして、その千里丘陵の豊かな自然は縄文人に鹿、魚、果実などの動植物を提供し、猪名川の流れは水稲耕作を知った人々に豊かな水を供給し、秋には多人な収穫をもたらしたことでしょう。そのことは、数多く存在する遺跡が雄弁に語っているところであります。

野畠春日町遺跡は千里丘陵をほぼ南北に貫いて流れる千里川の右岸河岸段丘上にあります。遺跡の存在はかねてから知られておりましたが、今回初めて正式な発掘調査を実施し、豊中の歴史を解明するうえで多人な成果を納めることができました。まず、縄文時代中期の遺物の出土したことは最近発見の相次いでいる千里川流域の縄文遺跡に新たな資料を加えることになりました。また、弥生時代前期の土器が出土したことは丘陵地への弥生文化の波及を考えるうえで今後に投げかける波紋は大きいと思います。

このように開発に伴なう発掘調査が進むにつれて農中の歴史がますます明らかになる一方で、祖先の慣れ親しんできた旧来の景観が消えていくことは皮肉な現実と言わざるを得ません。

いずれにせよ本書の発刊および出土遺物の公開を通じて市民の方々が少しでも郷土の文化財に対する理解を深めて頂ければ幸いと思います。

最後に、今回の調査実施にあたって多人な御援助ならびに適切な御助言を頂いた関係各位に深く感謝の意を表します。

野畠春日町遺跡発掘調査団

団長 亥野 強

## 例　　言

1. 本書は府営野畠住宅13号棟建築工事に伴なう発掘調査報告書である。
2. 調査は大阪府が野畠春日町遺跡第1次調査団と委託契約を結び、豊中市教育委員会社会教育課内に事務局を置いて、1986年4月2日より6月3日にかけて実施した。
3. 整理作業は1986年7月1日から翌年3月20日にかけて、豊中市立郷土資料室において行なった。
4. 本書の執筆および編集は山元建が行なったが、V・縄文土器は利山秀方氏（龍谷大学人文学院生）に、同・有舌尖頭器は山口卓也氏（関西大学文学部非常勤講師）に執筆および製図をお願いした。また、執筆にあたっては中世吉幸次郎氏（大阪大学教養部地学教室教授）間壁忠彦・茂子氏（倉敷考古館）、泉拓良氏（奈良大学文化財学科助教授）、福永伸哉氏（大阪大学文学部助手）の指導を頂いた。記して感謝する。
5. 遺構埋土については、（株）北海道測量岡工社にその分析および結果報告を依頼した。また、航空写真および測量は関西航測（株）に依頼した。
6. 遺構・遺物の製図は各執筆担当者が進行させたが、佐々木聖子、酒井泰子、今川直美、内藤万里栄、潮平ゆうこ、三村多喜子の協力を得た。また、写真撮影は山元が担当し、全体の編集に関しては団長および調査委員諸氏の指導を頂いた。
7. 発掘調査にあたっては、須藤宏、水野豊、人西博利の協力を得た。記して感謝したい。
8. 本書の図面の方位は全て磁北である。

# 本文目次

I 調査に至る経過	1
II 位置と環境	4
III 調査の概要	
遺跡の立地	7
調査区の設定	7
基本層序	8
IV 遺構	
縄文時代中期以前の遺構	10
縄文時代中期の遺構	11
弥生時代前期の遺構	18
黒色粘質土上面の遺構	25
時期不明の遺構	26
V 遺物	
縄文土器	30
弥生土器	34
須恵器他	34
有舌尖頭器	35
VI 野畠春日町遺跡の遺構に残存する脂肪の分析	43
VII まとめ	58

## 挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図	5
第2図	周辺地形図	7
第3図	調査区周辺図	8
第4図	調査区範囲図	9
第5図	基本層序模式図（調査区東壁）	9
第6図	S K - 3 平面図・断面図	10
第7図	S D - 1 平面図・断面図	11
第8図	S X - 1 平面図・断面図	11
第9図	S X - 2 ~ 5 平面図・断面図	13
第10図	S K - 4 中央部土器出土状態	14
第11図	S K - 4・5、S P - 1・2 平面図・断面図	15~16
第12図	有舌尖頭器出土状態	17
第13図	S P - 1 断面	17
第14図	S X - 6 平面図・断面図	18
第15図	S X - 7 平面図・断面図	18
第16図	S K - 6 平面図・断面図	19
第17図	S K - 8 平面図・断面図	20
第18図	S K - 9 平面図・断面図	20
第19図	S K - 7 平面図・断面図	21~22
第20図	S K 10~12、S P - 4 平面図・断面図	23
第21図	S K - 13、S D - 2 平面図・断面図	24
第22図	S K - 14・15、S D - 3・4 平面図・断面図	25
第23図	S K - 17 平面図・断面図	26
第24図	西方ピット群平面図	27~28
第25図	S K - 16、S P - 5・6 平面図・断面図	29
第26図	網文土器実測図（第1・2類）	31
第27図	縄文土器実測図（第3類）	32
第28図	弥生土器・須恵器他実測図	34
第29図	有舌尖頭器実測図	35
第30図	第I 遺構面全体図	37~38

第31図 第II遺構面全体図	39~40
第32図 調査区断面図	41~42
第33図 S K-7と遺構外に残存する脂肪の脂肪酸組成	50
第34図 S X-1に残存する脂肪の脂肪酸組成	51
第35図 遺構群に残存する脂肪の脂肪酸組成	52
第36図 S K-7と遺構外に残存するステロール組成	53
第37図 S X-1に残存するステロール組成	54
第38図 遺構外に残存するステロール組成	55
第39図 遺構群内外の土壤に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図	56
第40図 遺構内外の土壤に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関	57

## 表 目 次

第1表 織文土器観察表	33
第2表 野畠春日町遺跡の遺構群の土壤資料採集位置と残存脂肪抽出量	48
第3表 土坑内外の土壤に分布する $\alpha$ -レステロールとシットステロールの割合	49

## 図 版 日 次

図版 1 (1) 調査地遠景	
(2) 調査区全景	
図版 2 調査区全景(東より)	
図版 3 (1) S X-1(南より)	
(2) S X-3(東より)	
図版 4 (1) S X-3(北より)	
(2) S X-3 埋土縦出土状態(東端部)	
図版 5 (1) S X-4(北より)	
(2) S X-4 断面	
図版 6 S X-3・4(東より)	
図版 7 (1) S X-5(西より)	
(2) S X-5(東より)	
図版 8 S X-4・5、S P-1・2(東より)	
図版 9 (1) S K-4・5(北東より)	

- (2) SK-5
- 図版10 (1) SK-4 A-A'断面  
(2) SK-4 D-D'断面  
(3) SK-5 C-C'断面
- 図版11 (1) SK-10~13 (南東より)  
(2) SX-6 (南西より)
- 図版12 (1) SX-7 (南西より)  
(2) SX-7 (南東より)
- 図版13 (1) SK-6 (北より)  
(2) SK-6 断面
- 図版14 (1) SK-7 (東より)  
(2) SK-7 (南より)
- 図版15 (1) SK-7 断面  
(2) SK-7 断面 (北より)
- 図版16 (1) SK-9 (北より)  
(2) SK-10
- 図版17 (1) SK-11 (北より)  
(2) SK-11 断面
- 図版18 (1) SD-8 (南より)  
(2) SP-4 (北より)
- 図版19 (1) SK-15 (南より)  
(2) SD-3 (北東より)
- 図版20 (1) SD-4 (北東より)  
(2) 西方ピット群 (西より)
- 図版21 縄文土器 第1・2類 (約1/2)
- 図版22 (1) 縄文土器 第3類 (約1/2)  
(2) 陶棺片 (約1/2)  
(3) 丸片 (約1/2)
- 図版23 有舌尖頭器 (原寸)

# I. 調査に至る経過

## 調査の契機

野畠春日町遺跡は第2次人戦直後、藤沢一夫氏らが今回の調査地の北方で、弥生時代中期の遺物包含層を確認したことによりその存在が知られた遺跡である。<sup>1)</sup>その後正式な発掘調査がなされることはなかったが、近年、遺跡の範囲内に立地する府営野畠住宅の老朽化に伴う建て替えが計画されるに至り、地下の遺構・遺物が破壊される可能性が出てきた。そこで1986年3月、建設予定地内数ヶ所を重機により地下の状態を調べるために掘削したところ、第13号棟建築予定地内において遺物包含層状の黒色粘質土（第3層）を確認し、発掘調査の必要性が生じるに至った。今回の調査（第1次調査）は、その第13号棟建築予定地384m<sup>2</sup>を対象にして1986年4月2日より6月3日にかけて行ったものである。なお調査団の編成は以下のとおりである。

## 調査団の構成

団長 玄野 優 豊中市教育委員会社会教育課文化財担当嘱託

調査委員 富田好久 大阪青山短期大学専任講師（現在同大学助教授）

都出比呂志 大阪大学文学部助教授

堀江門也 大阪府教育委員会文化財保護課記念物第一係長

調査員 山元 塔 豊中市教育委員会社会教育課文化財担当嘱託

木下 宣 国学院大学大学院研究生（現在奈良県立橿原考古学研究所嘱託）

註1) 『豊中市史』第1巻 1961. 3. なお、文献によっては当遺跡を「野畠弥生遺跡」と呼称しているが適切ではない。

## 調査日誌抄

1986年

4月2日 第3層上面まで重機掘削（～3日） 調査区東壁に沿ってトレッジを設定

4月3日 北壁に沿ってトレッジを設定  
調査区東半部において検出した近代溝掘削

4月7日 第3層上面精査（～12日）

4月14日 第3層上面遺構掘削（～17日）

4月23日 第3層上面土上面遺構実測  
レベル記入 調査区東端第3層上面出土器（須恵器）取り上げ

4月24日 第3層上面遺構平板図作成 方形周溝墓状の遺構（S X-7）検出

4月25日 第3層掘削開始（～26日）

4月26日 第4層上面精査・遺構確認  
（～5月8日）

5月8日 第4層上面遺構掘削開始（～22日）

5月13日 SK-4 繩文土器出土状況写真撮影・図面作成

5月21日 野畠小学校6年児童見学

5月22日 航空測量用杭打ち

5月23日 遺構面清掃 （株）関西航測による航空写真および測量

5月24日 全体写真撮影

5月25日 現地説明会

5月26日 遺構部分写真撮影

5月27日 SK-3 掘削（～28日）

5月28日 SK-4 内溝状遺構より有舌尖



表土掘削開始時風景



調査風景

頭器 1 点出土

5月30日 SK-4・5 平面実測 調査区

平板実測（～31日）

5月31日 調査区北壁、東壁断面図作成

（～6月2日） 東壁写真撮影

6月3日 調査区埋め戻し開始（～4日）

平行して土壤サンプル採集 SX

- 5 写真撮影・平面図作成

6月4日 発掘調査作業終了



現地説明会風景

## II. 位置と環境

野畑春日町遺跡の所在する豊中市を中心とした西摂地域は地勢的に見て、千里丘陵・豊中台地・西摂平野の三つに大別できる。市内北部の大半は千里丘陵の西半部にあたり、1960年代以降の開発が進む前は一面竹林・松林であったところである。その千里丘陵をほぼ南流する千里川等の浸食作用によって形成された標高25~30mの段丘面が豊中台地で、ほぼ市の中央部に位置する。また、市の西部~南部は猪名川・神崎川等の沖積作用によって形成された西摂平野が広がっている。

このように比較的变化に富む地勢を有する豊中山周辺には数多くの遺跡が存在し、豊中山螢池西遺跡・箕輪遺跡・大塚古墳墳丘内・柴原遺跡のナイフ形石器はその初出が1万年以前の旧石器時代に遡ることを示している。

続く縄文時代の遺跡としては、当遺跡の他に豊中山野畑遺跡（中期末~後期前半）、柴原遺跡（晚期）、箕面市稻遺跡（前期）、瀬川遺跡（前期・後期）など千里川流域とその周辺に多く認められる。ただ、晚期後半を中心とした遺跡が伊丹市口酒井遺跡、尼崎市園田競馬場付近猪名川川床・上ノ島遺跡など平野部に多く出現し、既に水稻耕作が一部で始まっていたようであり、豊中市山ノ上遺跡の講から弥生前期の土器と晩期・突堤文土器（長原式？）の両者が混在して出土したことは興味深い。

弥生時代に入ると平野部を中心に遺跡は急増する。池田市宮ノ前遺跡（中期）、川西市加茂遺跡（中・後期）、豊中市螢池西遺跡（後期）・箕輪遺跡（中・後期）・利倉西遺跡（後期）、穂積遺跡（後期）・小曾根遺跡（前・中期）・勝部遺跡（前・中期）、尼崎市田能遺跡（前~後期）・上ノ島遺跡（前期）などがその例としてあげられよう。また、箕面市如意谷、宝塚山満願寺・中山、川西市栄根、伊丹市中村、豊中市原田神社境内・利倉遺跡から銅鐸が出土している。なお、池田市五月山山頂遺跡、豊中市待兼山遺跡はいわゆる高地性集落であろう。

古墳時代に入ると、宝塚市刀額山古墳・長尾山古墳・安倉古墳、池田市茶臼山古墳・嶽三堂古墳、豊中市待兼山古墳・御神山古墳などの前期古墳が山麓や丘陵端部を中心に築かれ、中期は豊中市桜塚古墳群・尼崎市猪名野古墳群に収斂する傾向がある。後期古墳は箕面川を臨む段丘面上に存在する箕面市桜古墳・中尾塚古墳、池田市狐塚古墳・二子塚古墳、あるいは山地に位置する群集墳である仙塚市雲雀山古墳群などが知られ、池田市鉢塚古墳は巨大な横穴式石室を有する上円下方墳として著名である。また、穂積遺跡からは円筒埴輪・形象埴輪を立ち並べた円墳跡が見つかっており、低地にも後期古墳のあったことが確認された。なお、豊中山太鼓塚古墳群は須恵器の陶棺を内部に納めており、付近一体に広がる桜井谷古窯跡群に關係する人々の墳墓と考えられる。当時の集落はまだ判然としない点が多いが、豊中市利倉西遺跡などがそ



- |               |              |                       |             |               |
|---------------|--------------|-----------------------|-------------|---------------|
| 1. 野田塚古墳      | 8. 野畠春日町遺跡   | 15. 内田遺跡              | 21. 葉輪遺跡    | 28. 塩田神社銅鐸出土地 |
| 2. 須坂古墳       | 9. 潟川遺跡      | 16. 萩原遺跡              | 22. 金寺山魔寺   | 29. 櫻塚古墳群     |
| 3. 二子塚(稻荷山)古墳 | 10. 徒霧山古墳    | 17. 桜井谷窯跡群<br>④現存 ⑤消滅 | 23. 新免石山古墳群 | 30. 小石塚古墳     |
| 4. 中尾塚古墳      | 11. 徒霧山遺跡    | 24. 本町遺跡              | 31. 大石塚古墳   |               |
| 5. 太鼓塚古墳群     | 12. 宮の前遺跡    | 18. 上野遺跡              | 25. 新免遺跡    | 32. 大塚古墳      |
| 6. 稲遺跡        | 13. 宝池北遺跡    | 19. 黄池西遺跡             | 26. 山ノ上遺跡   | 33. 開跡子塚古墳    |
| 7. 野柳遺跡       | 14. 桜井谷石器散布地 | 20. 御神山古墳             | 27. 下原麻跡群   | 34. 南大平塚古墳    |

第1図 周辺遺跡分布図

の中心的な位置を占めていたと考えられ、山ノ上遺跡・内田遺跡などからは竪穴式住居が確認されている。また、豊中市本町遺跡・柴原遺跡・新免遺跡からは須恵器の未完成品が多量に出土しており、先述した桜井谷古窯跡群で生産された須恵器の集積地であった可能性が強い。

7世紀に入ると各地の豪族は古墳造営に費やした労力を寺院建立に向かって始め、豊中市域でも飛鳥時代末の創建と考えられる金寺山廃寺が知られる。

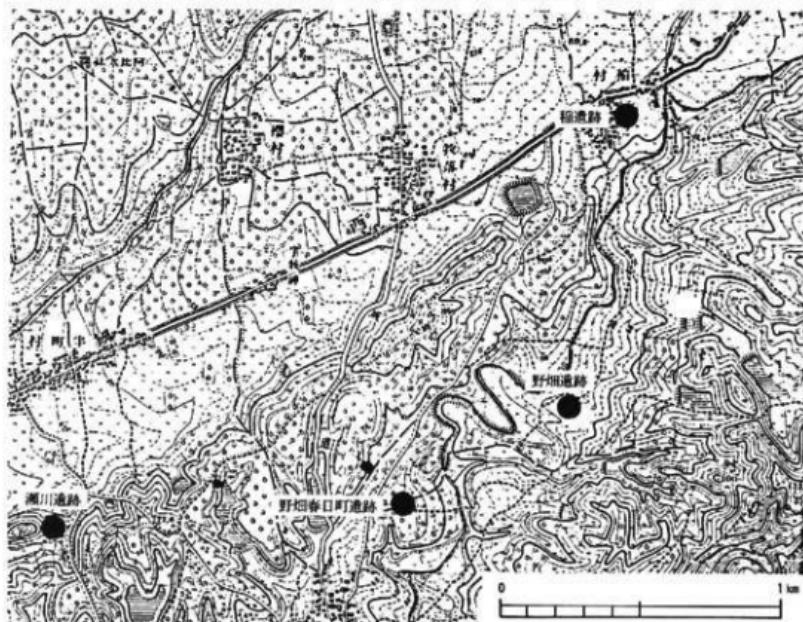
律令制下では、西摂平野はほぼ猪名川を境に豊島・川辺両郡に編入される。上津島南遺跡から重圓文軒丸瓦、銅鏡等が出土しており、豊島郡衙に関係する遺跡の可能性も説かれている。また、柴原遺跡・曾根遺跡では奈良時代の掘立柱建物が検出されている。平安時代になると先述した上津島南遺跡で掘立柱建物、墓等を検出しており律令制の弛緩の進む中で出現した有力農民の姿を彷彿とさせる。

中世の遺跡は、当時の権坂郷内に存在する豊中市小曾根遺跡・穗積遺跡等を確認しており、これらの遺跡の調査成果は、市内今西家に残る「権坂郷川島取帳」との照合が可能であり、中世村落の実態をより具体的に解明できるものと考えられる。

### III. 調査の概要

**遺跡の立地** 野畠春日町遺跡は、豊中市北部、現在の地名では豊中市春日町4丁目にあたり、地理的には、吹田市から豊中市北部にかけて広がる千里丘陵の西端付近をほぼ南北に貫いて流れる千里川の右岸にあたる（第2図 図版1）。さらに詳細に遺跡の立地する地形を観察すると、東側と南側に蛇行する千里川が流れ、西側には小谷を有する標高48mの独立台地状の地形を呈し、千里川中流域においては比較的平坦な地形を形成している。なお、1986年11月から翌年3月にかけて行った第2次調査において、今回の調査区の東約100mで、標高差3mの斜面を検出し、さらにその下部に標高41.5m程の平坦面の続いていることが判明した。おそらく両平坦面とも千里川の浸食によって形成された中位段丘面にあたるものと考えられる。

**調査区の設定** 今回の調査区は府営野畠住宅13号棟の建設予定地であり、その面積は約384m<sup>2</sup>（東西32m、南北12m）を測る。調査区内は直交する南北、東西ラインによって一辺5mの区画に分割し、南北ラインは東からアルファベット（A～G）で、東西ラインは北からアラビア数字（1～3）で示し各区画は北東交点の座標をもって呼称した。（例・A-1区、B-2



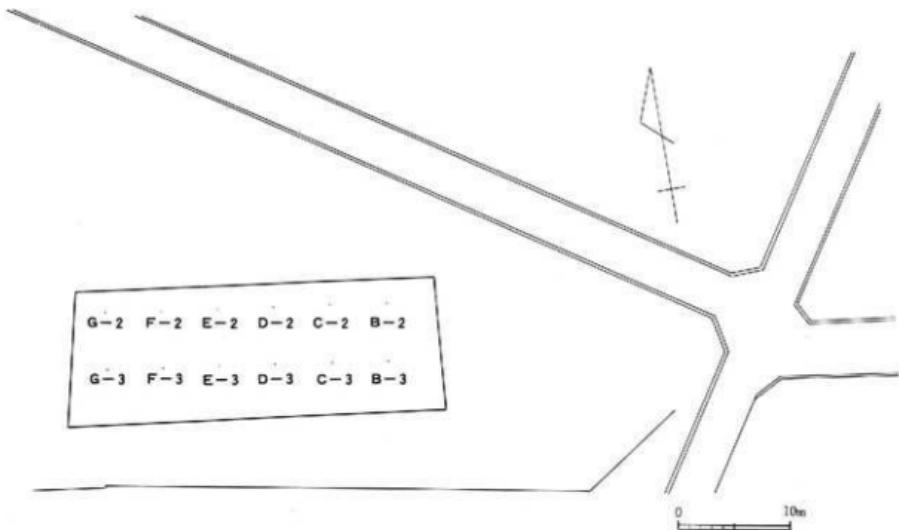
第2図 周辺地形図

区) なお、ラインは調査区の壁面を基準に設定したため磁北と合わず、その方向はN-5°-Eである(第4図)。

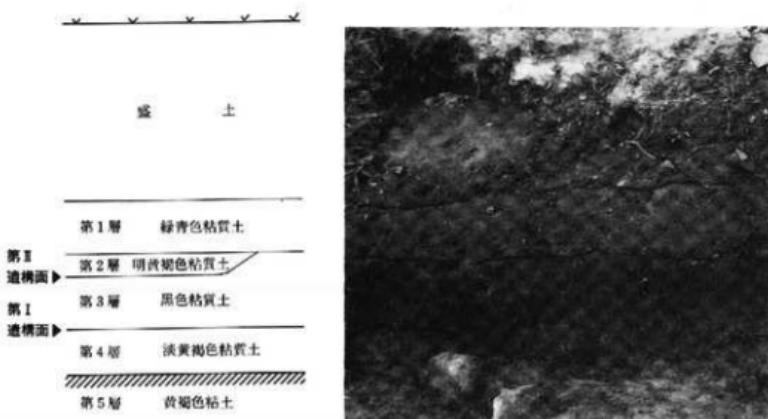
基本層序 調査区の基本層序は第5図に示すとおりである。第1層は緑青色の粘質土で近年までの耕作に関する層で、第2層は明黄褐色粘質土である。第3層は黒色粘質土で上層遺構のベースとなる層であり、古墳時代の須恵器を少量含む。第4層は淡黄褐色粘質土で、繩文時代中期、弥生時代前期の遺構のベースとなる層である。第5層は黄褐色粘土の疊混りの地山である。第4・5層からは全く遺物は認められなかった。調査区の北西端部は、地山が50cm程高まっており、その影響で各層とも縁を多く含むようになりながら西端付近で認められなくなり、盛土の直下に地山が続くようになる。なお、その北西端部の地山の高まりを囲むようにして幅5mにわたって第4層上面より深さ20cm程の落ちが認められ、内部には暗黄褐色疊混土(地山の2次流出土)が堆積していた。



第3図 調査区周辺図 (1/4000)



第4図 調査区範囲図



第5図 基本層序模式図（調査区東壁）

## IV. 遺構

今回の調査では、第4層上面の第I遺構面と、第3層上面の第II遺構面の計2面を検出した。第I遺構面の遺構は、出土した土器から考えて、その大部分が縄文中期前半と弥生前期のものと考えられる。しかし、縄文土器と弥生土器の出土した遺構は各々SK-4・5とSK-7に限られるため、他の多くの遺構の帰属時期の決定は困難を極める。ただ、そのSK-4・5とSK-7を比べた場合、ともに埋土は基本的には漆黒色の粘質土であるが、弥生前期のSK-7では、その最下層を中心に固くしまった灰色粘質土が認められる。ゆえに一定以上の規模を有する遺構に関しては、その灰色粘質土の有無が時期決定の鍵となるものと考える。遺構の性格等を度外視した乱暴な方法であるが、それを殆ど唯一の基準として、遺構の帰属時期を決定し、改めて考察を加えてみることにする。

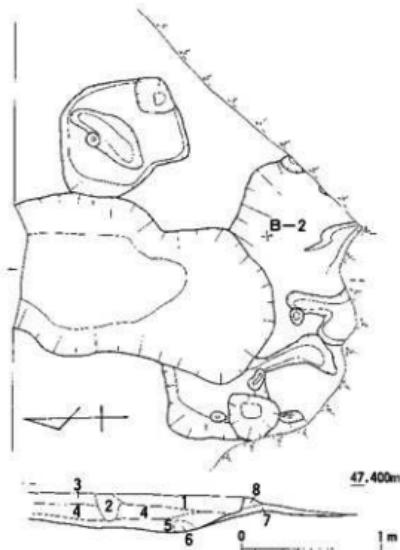
第II遺構面では、溝、ピットを検出した。しかしそれらの遺構からも遺物は出土せず時期決定は難しい。ただベースの第3層中から古墳時代後期の須恵器が少量出土しているため、それ以降のものであろう。

### 縄文時代中期以前の遺構

調査区の中央やや西寄りで、ベース層である淡黄褐色粘質土に極めてよく似る淡黄灰色砂土を埋土とする遺構等を検出した。

落ち込み D-2区からE-2・3区にかけて広がる不整形の落ち込みで、最大幅は3ライン付近では3.6mを測るが、北端部のSK-4付近では1.4mと狭く、溝状を呈する。長さは南端部をSD-2によって切られており明らかにし難いが、現存長7.2mである。深さは5~10cm程度である。

SK-1 E-1区とF-1区にわたって検出した1坑で、東西1.0m、深さ10cm程度を測る。南北長は北端を断面観察用トレンチによって破壊してしまい、明らかでできなかったが現存長1.0mを測る。



- |                         |           |
|-------------------------|-----------|
| SK-1埋土                  | SK-3埋土    |
| 1. 漆黒色粘質土               | 7. 黄灰色粘質土 |
| 2. * (茶褐色<br>粘質土を若干含む。) | 8. 茶褐色粘質土 |
| 3. * (茶褐色<br>粘質土を多く含む。) |           |
| 4. 噴茶褐色粘質土              |           |
| 5. 茶灰色粘質土               |           |
| 6. 暗黄褐色土(地山土)           |           |

第6図 SK-3平面図・断面図

S K - 2 S K - 1 のすぐ南東で検出した土坑で、深さ 3 ~ 4 cm を測るが、北東部分は緩やかに傾斜し、明瞭な肩部は認められなかった。

以上の遺構は形も不定形で極めて浅く、遺物も出土していないため、人為的に掘削されたものではないようである。

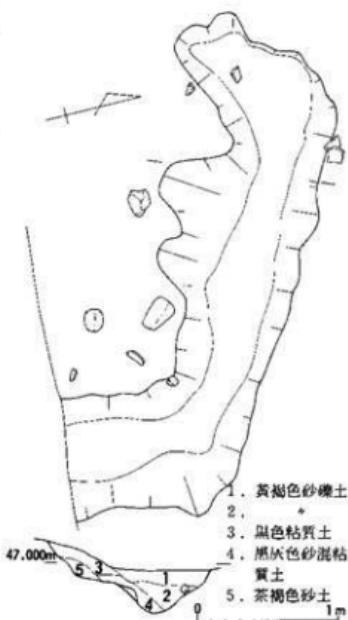
S K - 3 (第6図) B - 2 杖付近において第3層(黒色粘質土)を除去した後に検出した不定形の土坑で北端は調査区外に伸び、南端は近年までの溝が切られているため全容は明らかにし得ないが、長さ約2.4mを測る。土坑中央は S K - 16 によって削平されている。埋土は S K - 1・2 同様淡黄灰色粘質土である。なお、S K - 3 埋没後に堆積した茶褐色粘質土層(第8層)より縄文土器と思われる細片が出土している。

S D - 1 (第7図) C - 3 付近地山直上で検出した溝で、ほぼ東西に3.6m続いた後、その東端で南方に向きを変え調査区外に伸びる。幅は0.7 ~ 1.2mでやや出入りが激しく、深さ約50cm程度である。埋土は赤褐色の疊混土であり、S K - 7 に北端を切られている。遺物の出土も皆無であり、おそらく自然の溝と見られる。

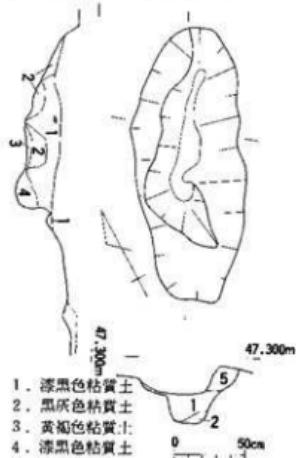
#### 縄文時代中期の遺構

縄文時代中期の遺構は、5基の土塙墓と土坑、それに若ドのピットである。

S X - 1 (第8図 図版3) B - 1 区から 2 区にかけて検出した土塙墓で、ほぼ南北に主軸をとり、やや細長い格子形を呈する。長さ 1.95m、幅 0.8m、深さ 0.5m を測る。ただ土塙墓南端部は、長さ 0.4m にわたってテラス状の面を形成した後底部に落ち込み、西側壁も一段設けた後下部に至る。おそらく実際堆糞に利用されたのは、南端テラス部を除く長さ 1.6m、幅 0.6m の深く落ち込む部分であったと考えられる。なお、北壁には段状の施設は認められず、



第7図 SD-1 平面図・断面図



第8図 SX-1 平面図・断面図

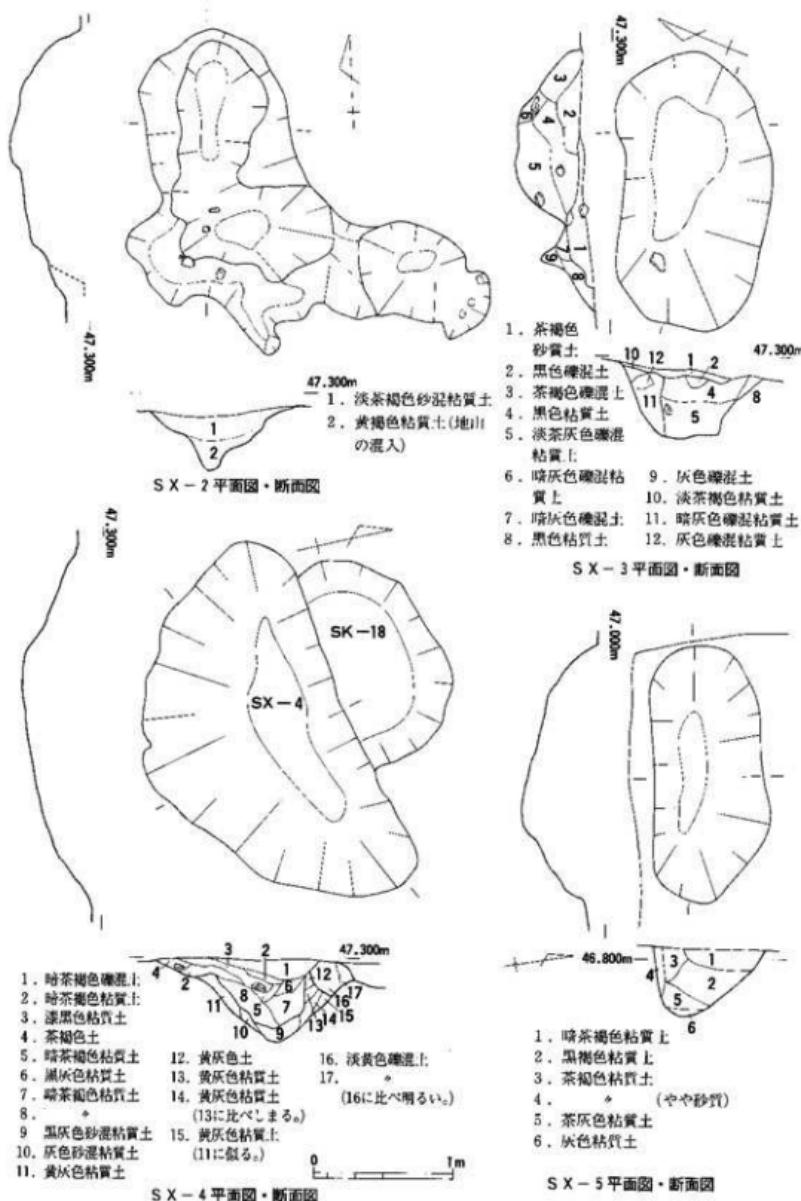
東側壁はややふくらみ気味に落ち込む。各壁面ともかなり凹凸が目立ち、底部は幅20cmと狭いながらもほぼ平坦である。人骨・副葬品等は全く認められなかった。

S X - 2 (第9図) S X - 1 のすぐ南西のC - 2区内で検出した土壙墓である。幅約1.0m、深さ0.5mを測り、全長は南端部を他の遺構と切り合うため明らかにし得なかつたが、1.8m前後と考えられる。土坑の北端部はほぼまっすぐ落ちて底部に至るが、東西両側壁は一度段を設けた後、狭い底部に続く。埋土上半を中心で縁が認められたが、意識的に配したものか否かは明らかにし得なかつた。

S X - 3 (第9図 図版3・4) S X - 1 の西方4.6mのC - 1 区南西隅で検出した土壙墓で、北東-南西に主軸とり、長さ2.0m、幅1.0m、深さ0.6mを測る。平面はいびつな隅丸長方形とでも言うべき形状を呈している。土坑の壁面は凹凸が激しく、概してふくらみ気味に緩やかに落ちるが、北側壁はかなり傾斜が急で、西端部には長さ50cm程のテラス状の段が認められるが、やや凹凸が目立つ。本来埋葬に利用されたのは西端の段状部を除く長さ1.4mの部分であろう。埋土は他の遺構同様、漆黒色・茶褐色の粘質土が基本であるが、北西-南東断面を観察すると、その北側壁肩部から南約30cmで、検出面直下から下端部にかけてほぼ垂直に走る明瞭なラインが確認された。おそらく遺体の腐敗に伴って遺体上部の埋土が陥没した際に形成されたものであろう。なお土坑埋土中には奉大の縁が散見され、特に東端部検出面付近では、厚さ30cm程にわたって落ち込むような形でその存在が認められた。それらはおそらく上坑上面に配されていた縁が、埋土の陥没と同時に落ち込んだものと考えられる。先述した陥没埋土以外には縁は殆ど認められない点もそのことを傍証している。

S X - 4 (第9図 図版5・6) D - 1 区から2区にかけて、S X - 3 とはば上軸をあわす形で検出した土壙墓で、長2.75m、幅1.5m、深さ0.6mを測り、北辺はSK - 18によって肩部を破壊されている。南北両側壁は、他の土壙墓に比べ緩やかに落ちるが、南側壁では検出面から15~25cm下がったところでわずかに段状の部分が認められる。しかし、底面は狭く、あまり面を形成することを意識しなかつたようである。埋土は黄灰色粘質土系の色調で固くしまる下層と、茶褐色粘質土系の上層に大別できる。南北断面の観察では、その両肩を隔てる明瞭なラインを確認し、特に北壁側ではほぼ垂直にそれが認められた。おそらくS X - 3 同様上・下層は、各々遺体の腐敗後陥没した埋土と土坑本来の埋土にあたると考えられる。なお、上層中より数個の奉大の縁が出土したが、それが本来の配石等に伴うものか否かは確認できなかつた。なお、墓壙両端はかなり急に落ち込み、S X - 1・3 で認められたテラス(段)状の施設は認められなかつた。

S X - 5 (第9図 図版7) 調査区の南東端部付近において調査終了間際に確認した土壙墓で、東西に主軸をもち、やや細長い梢円形状を呈するが、南北辺はかなり直線的で平行している。長1.9m、幅0.8m、深さ0.5mを測る。土坑北側壁は、ややふくらみ気味に底部に至り、



第9図 S X - 2 ~ 5 平面図・断面図

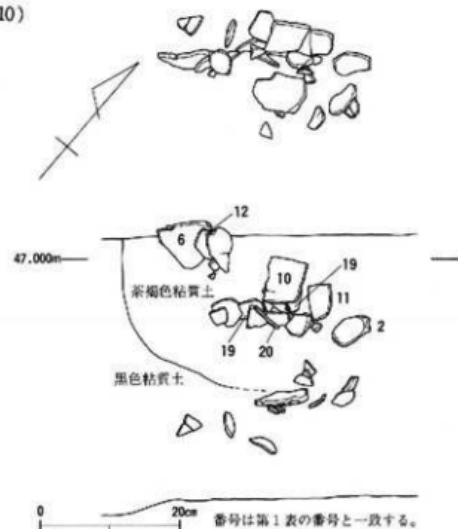
両端部も比較的緩やかであるが、南側壁はほぼ垂直に落ちるため、底部は土坑主軸よりやや南に寄った形で形成されている。底部は明確に平坦面を意識した様子はなく、側面から丸みをもって続いている。人骨・副葬品等は認められなかったが、底面東端付近に礫が1個置かれていた。

なお、このS X-5を隅む方形の浅い落ちを検出した。この落ちは南側と西側は調査区外に伸びるが、検出長2.6m(北辺)、1.9m(東辺)、深さ0.5mを測り、埋土は礫混りの黒色粘質土である。遺物は出土しなかった。この落ちとS X-5の関係は新旧関係を含めて明らかにすることはできなかった。

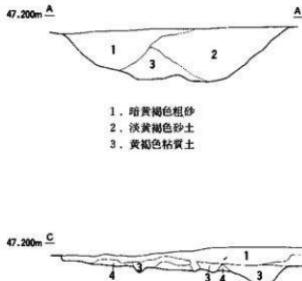
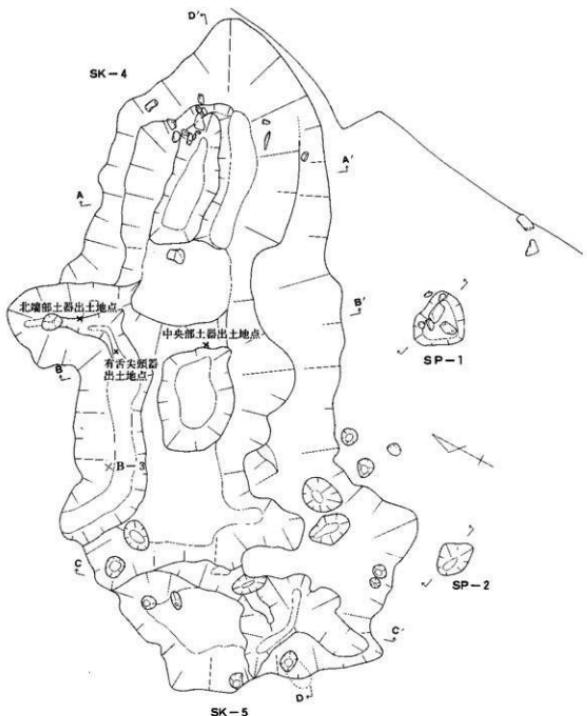
#### S K-4 (第10・11図 図版8・9・10)

調査区東端近く、A-2区から3

区にかけて主軸を北東～南西にとつて掘削された土坑で、南西部はSK-5を切り合っているものの、全長4.8m、幅2.4mのはぼ楕円形を呈する土坑と考えられる。土坑壁面は、さほど凹凸が認められず、概ね緩やかに底部に統くが、黄褐色の礫を埋土とする溝状構造が、上坑の北壁を破壊して北辺に沿う形で長さ4m、幅0.8mにわたって走っているため北辺はやや急峻な感を呈する。南西壁は途中で一段設けた後、土坑中央にやや高い部分を残して北東側と南西側が低くなり、あたかも2つの土坑が連結したかのような状況を呈している。埋土は概ね漆黒色～暗茶褐色の有機質の粘質土であるが、断面を詳細に観察するならば、土坑の北東部と南西部に掘り返しを示す斜め下方に統くラインが認められ、先述したSK-4を二つに分つ形で認められた底部は、土坑が一旦埋った後再掘削された際に形成されたものであることが判明した。その掘削回数

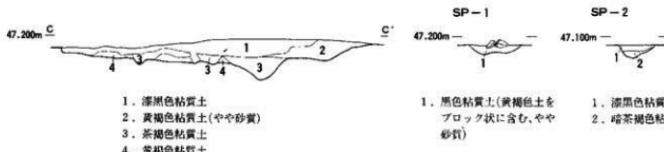


第10図 SK-4 中央部土器出土状態



1. 暗黃褐色粗砂
  2. 淡黃褐色砂土
  3. 黃褐色粘質土

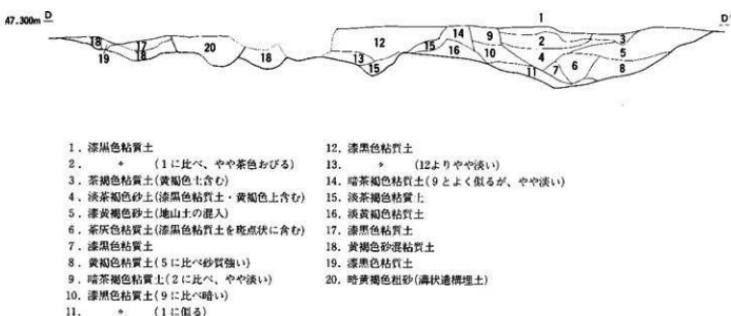
- |                                   |                    |
|-----------------------------------|--------------------|
| 1. 黄褐色暗温沙质土(溝状連續埋土)               | 7. 哈茶褐色粘質土(5とほば同層) |
| 2. 黑色粘質土和黃褐色砂温粘質土<br>的混在层(溝状連續埋土) | 8. " "             |
| 3. 茶灰色砂温粘質土(溝状連續埋土)               | 9. 淡黃褐色砂土(地山の混入)   |
| 4. 深黑色粘質土                         | 10. 黄褐色粘質土(地山の混入)  |
| 5. 喀茶褐色粘質土                        | 11. 茶灰色砂温粘質土       |
| 6. 黄褐色砂温粘質土                       |                    |



1. 漆黒色粘質土
  2. 黃褐色粘質土(やや砂質)
  3. 茶褐色粘質土
  4. 黄褐色粘質土

- #### 1. 黒色粘質土(黄褐色土を ブロック状に含む、やや 砂質)

1. 漆黑色粘質土
  2. 暗茶褐色粘質土



1. 漆黒色粘質土
  2. \* (1に比べ、やや茶色をおびる)
  3. 茶褐色粘質土(黄褐色1:含む)
  4. 漆黒褐色砂土(漆黒色粘質土・黄褐色土を含む)
  5. 漆黒褐色砂土(地山土の混入)
  6. 茶褐色粘質土(漆黒色粘質土を斑点状に含む)
  7. 漆黒色粘質土
  8. 黄褐色粘質土(5に比べ砂質強い)
  9. 噴茶褐色粘質土(2に比べ、やや淡い)
  10. 漆黒色粘質土(9に比べ暗い)
  11. \* (1に似る)

- 12. 漆黑色粘質土
  - 13.      (12よりやや淡い)
  - 14. 暗茶褐色粘質土(よく似るが、やや淡い)
  - 15. 淡茶褐色粘質土
  - 16. 淡黃褐色粘質土
  - 17. 漆黑色粘質土
  - 18. 黄褐色砂混粘質土
  - 19. 漆黑色粘質土
  - 20. 時黃褐色粗砂土(溝状透水構造)



第11圖 SK=4:5 SP=1:2 平面圖・断面圖

は土坑南西部で1回以上、北東部で2回以上行われたものと見られる。土坑のほぼ中央部および北端部の2ヶ所で縄文土器が一括で出土した(第10図)。また、先述した北壁に沿う溝の底部分から有舌尖頭器が1点出土している(第12図 図版23)。

このSK-4の性格は、埋土が有機質の漆黒色あるいは暗茶褐色の粘質土である点、あるいは何個か掘り返しが見られる点から貯藏穴、もしくはゴミ捨て場の可能性が考えられる。

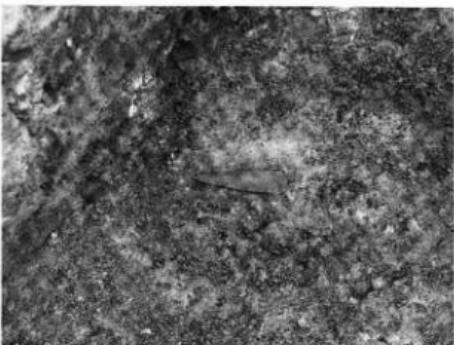
#### SK-5 (第11図 図版9・10)

SK-4に続く形でその南西に存在する土坑で、SK-4と切り合う部分を先述した溝状遺構その他で切られており、両者の前後関係は明らかにできなかった。全体の形状もSK-4と切り合う北東部が不明確なため充分知り得なかつたが、南西辺部を上辺とする台形が想定でき、そ

の規模は長さ3.1m、幅1.6m程になると考えられる。土坑は深さ15~20cmを測り、壁面、底面とも凹凸が激しい。埋土は漆黒色・茶褐色の粘質土である上層と、地山とはほぼ同質の下層とに大別できる。なお、土坑肩部内外を中心に直径10~20cm、深さ5~10cm程のビットをいくつか確認できた。それらの多くは垂直に掘り込まれているが、南西辺部中央のビットは土坑壁面からほぼ水平に掘り込まれている。それらのビットは、その埋土が漆黒色粘質土である点から、下層の堆積後に削除されたものと考えられる。なお、埋土上層より数片の縄文土器が出土した(第26図 図版21)。

SK-5の性格については、明確に判断する材料に欠けるが、先述した小ビットを考慮するならば、簡単な竪穴状の建造物を想定することも可能である。

SP-1~3 (第11・13図) SK-4・5の南側および東側で、3ヶ所のビットを検出した。いずれも直径40~50cm、深さ10cm程の不整形のビットで、埋土も漆黒色あるいは暗茶褐



第12図 有舌尖頭器出土状態



第13図 SP-1断面

色の粘質土である点も共通する。ただ、S P - 1 は長さ10~20cm程の縫を混えており、屋外炉の可能性もあるが、縫あるいは地表面には火を受けた痕跡は認められなかった。

#### 弥生時代前期の遺構

調査区中央部付近を中心には不定形な土坑・溝を検出した。

また、S X - 6・7 は墓であろう。

S X - 6 (第14図 図版11) C - 2 杭のすぐ西側で検出した。土軸を北東~南西にとり、長さ1.2m、北東辺幅56cm、南西辺幅72cmのやや台形状の長方形を呈する土壤墓である。土坑壁面は緩やかに落ち、底部はほぼ平坦である。埋土は全体に淡いアズキ色状の茶褐色粘質土を呈するが、北西~南東断面を見ると、土坑南東側肩部から10m余りのところではば垂直に落ちるラインを確認し、平面等では確認できなかったものの木棺等の痕跡を示すのかもしれない。

S X - 7 (第15図 図版12) D - 3 区北東隅で検出した。

コの字形の周溝に囲まれた土壤墓

で、一見したところ、北東~南西方向に土軸をとる方形周溝墓を思わせるものである。周溝は、北西辺1.8m、北東辺1.6mそして南北辺2.3mを割り南北部は、北西辺および南東辺端部が比較的急に立上り、少なくとも周溝がさらに統一していた状態ではないことから考えて、当初より南西部の周溝は存在しなかったようである。周溝の幅は北東辺端部付近で30cm程度とやや狭いほかは50~60cmではば一定しており、コーナー部分が狭くなる傾向も認められない。しかし、各辺の深さにはかなりアシバランスがあり、特に南東辺は40~50cmと深く、また底面も凹凸が激しいため全体に急峻な印象を受けるが他の辺は多少の凹凸は認められるも



第14図 S X - 6 平面図・断面図



第15図 S X - 7 平面図・断面図

の全体に5cm前後と浅い。ただ、両コーナー部と北西辺端部付近は15cmとやや深くなる。主体部とあわられる土坑は周溝内側や北西コーナー部より設けられており、長さ75cm、幅45cmの若干いびつな長方形を呈する。深さは約10cmで、壁面はSX-6同様なだらかに落ちて底面に続き、底面は平坦である。埋土も淡茶褐色粘質土でSX-6と同質である。なお、遺体あるいは副葬品等は検出できなかった。

SX-6・7を弥生前期の墓とした根拠は、SX-7周溝の埋土に弥生土器を検出したSK-7同様、灰色粘質土が認められ、その周溝部に囲まれて主軸を一にして存続する長方形の土坑を主体部と判断

したことによる。

ひいては、そのSX-7主体部と埋土の色調あるいは平面形、主軸方向が共通するSX-6も周溝こそ巡らないものの土壤基と見られる。ちなみに、アズキ色状の茶褐色粘質土を

基調とする埋土を有する遺構は、今回の調査ではSX-6とSX-7主体部だけである。

なお、両者ともその規模から子供用の墓と推定される。

**SK-6（第16回 図版13）** D-2区～E-2区で検出したほぼ東西に主軸をとる不定形の土坑である。



- |                      |                            |
|----------------------|----------------------------|
| 1. 黄褐色砂礫土の新しい遺構      | 8. 灰色粘質土                   |
| 2. 茶褐色粘質土            | 9. 漆黒色粘質土(灰色土混在)           |
| 3. 漆黒色粘質土            | 10. 黒色粘質土                  |
| 4. * (地山上や漆黒色土を多く含む) | 11. 黄褐色砂土(落ち込み埋土)          |
| 5. 漆黒色粘質土(黄褐色粘質土混在)  | 12. 黒色粘質土(灰色土を多く含む。落ち込み埋土) |
| 6. * (灰色土混在)         |                            |
| 7. *                 |                            |

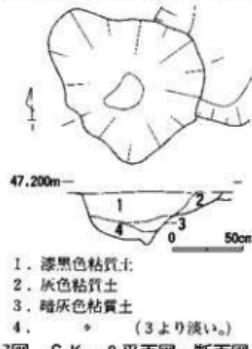
第16回 SK-6 平面図・断面図

長さ4.2mを測り、最大幅は2.3m程であるが、中央部はやや幅を減らし1.6m程である。また、その幅を減じる部分はやや浅くなっている。またかも二つの土坑の切り合っているようにも見えるが、後世の攪乱に切られているため詳細は明らかにできなかった。深さは最も深い部分で0.4m程を測る。堆土は大部分が漆黒色粘質土であるが、南北断面によると南側斜面の底部に灰色粘質土の堆積が認められる。

S K - 7 (第19図 図版14~15) C-2区からC-3区にかけて検出した不定形の土坑である。その規模は東西5.2m、南北3.2mを測り、深さは0.5~0.6mであるが、底部は凹凸があり激しい。もう少し詳しくみると、SK-7は厳密には東西2つの土坑が切り合った状態を呈しており、断面観察によると東側の土坑の方が古いことが判明した。堆土は漆黒色粘質土(上層)、茶褐色粘質土(中層)、灰色粘質土(下層)の3層に大別できる。その堆積はレンズ状を呈し、長時間にわたり徐々に埋っていたのである。なお東側土坑の北部から中央部にかけて東側土坑を切る形で黄褐色砂礫土を埋上とする土坑を検出した。遺物は東側土坑の上層から弥生時代前期の土器細片が若干出土した(第28図)。

このSK-7の性格についても判然としない。調査時は東側の土坑をいわゆる風倒木痕と考え、先述した黄褐色砂質土の上坑部分を本来、樹木の幹のあった部分と想定した。しかし、東側土坑の他の埋土部分には倒木などで乱された状態は全く認めることができず、この解釈にはかなり無理がある。また、埋土の分析から高等動物の遺体の存在が確認されている。そのことを重視するならば、恐らくは貯蔵穴・ゴミ捨て場の可能性が考えられるが、先述した堆積状況などから墓とは考えにくく、ここでは貯蔵穴もしくはゴミ捨て場と見ておきたい。

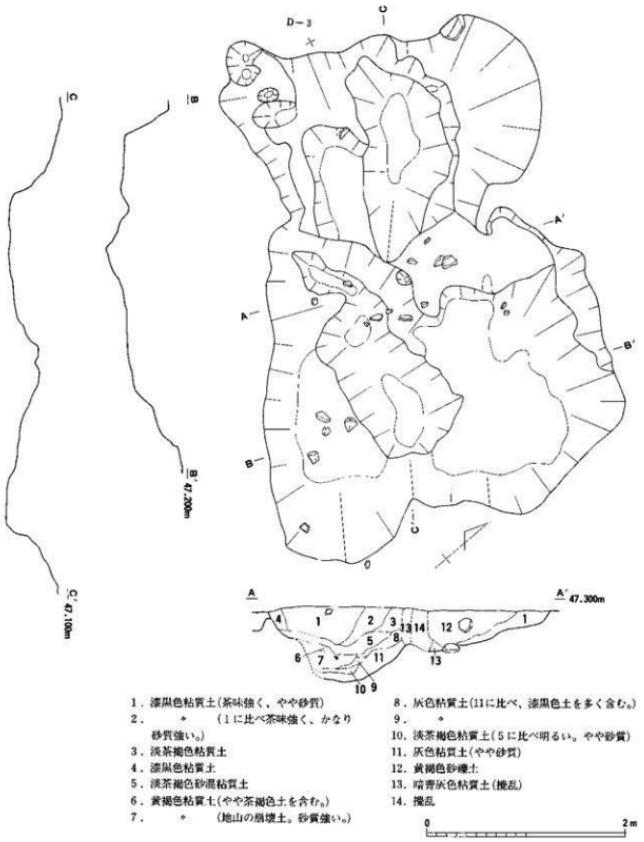
S K - 8 (第17図) A-1区で検出したほぼ円形の土坑で、直径は北東~南西方向で1.0m、北西~南東方向で1.2mを測り、深さは0.35m程である。遺構の北壁と南壁は急であるが、北東側のやや突き出た部分、あるいは東壁は緩やかで、後者は若干テラス状の



第17図 SK-8 平面図・断面図



第18図 SK-9 平面図・断面図

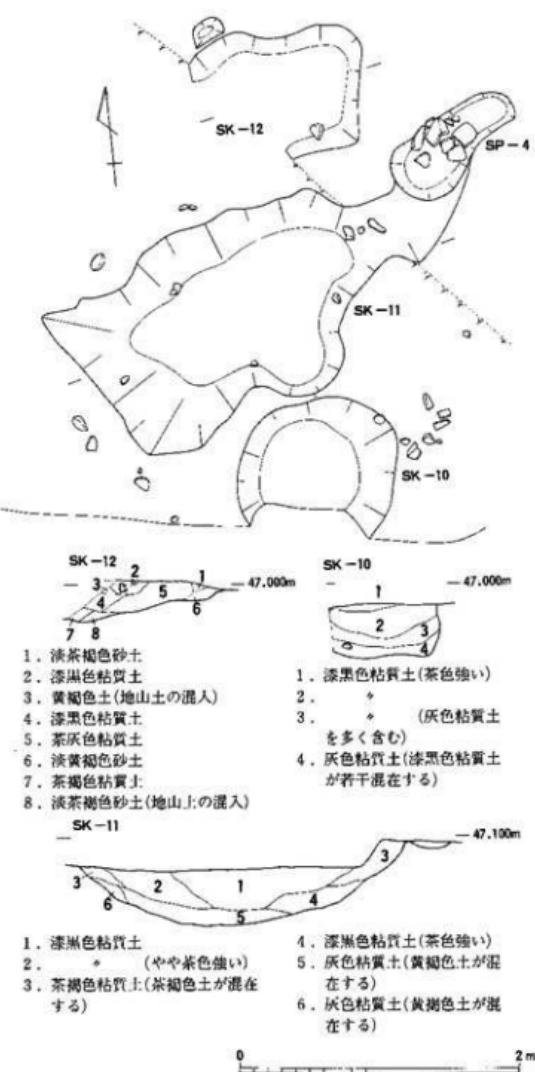


第19図 SK-7 平面図・断面図

掘り残しが認められる。埋上下層は灰色粘質土、上層は漆褐色粘質土である。遺物は認められなかった。

S K - 9 (第18図 図版 16) B - 2 区南端で検出した直径約1.5m、深さ0.5mのほぼ円形の土坑であるが、その南東部は近代の溝によって大きく削平されている。壁面はかなり凹凸で底面は比較的平坦である。埋土は、下から黄褐色粘質土、灰色粘質土、漆黒色粘質土がレンズ状に堆積し、黄褐色粘質土は地山の崩壊上である。遺物は認められなかった。

S K - 10 (第20図 図版 11・16) D - 3 区の調査区南壁にその南端がかかる状態で出土した土坑で、直径1.2mの円形を呈する。壁面はややえぐれ、袋状を呈し、底面は平坦である。深さは0.4mを測るが、上部を道路によって削平されていることを考えると、本米は少なくとも60cmはあったと思われる。埋土は、下から灰色粘質土、漆黒色粘質土がレンズ状に堆積する。遺物は出土しなかった。造



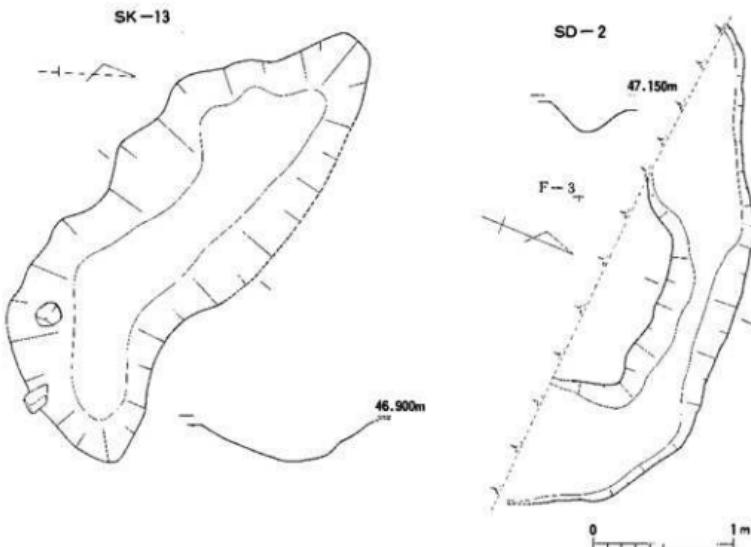
第20図 S K - 10~12、S P - 4 平面図・断面図

構の性格は、その形態から貯蔵穴が考えられる。

S K - 11 (第20図 図版11・17) D - 3 区～E - 3 区で検出した北東～南西に主軸をとる細長い土坑で、長さ2.9m、深さ0.4mを測るが、最北部を除く大部分は道路によって削平されており、本来は各々3.1m、0.6m以上はあったと見てよいだろう。土坑はほぼすり鉢状に底面に至り、壁面に凹凸は目立たないが、東壁はやや急に落ちる。埋土は上層の漆黒色粘質土が開層として一部に認められる。断面をさらに詳細に観察するならば、まず南方から灰色粘質土が流れこんだ後に、南北両側から漆黒色粘質土が堆積した状態が看取される。遺物は上層から極めて微細な土器片が出土したにとどまる。

S K - 12 (第20図 図版11) D - 3 区西端部で検出した現存長1.1m、幅1.0mの不定形な方形の土坑で、南端は近年の道路で削平されている。埋土は漆黒色粘質土と茶褐色の粘質土が交互に堆積したような状況を呈し、断面は肩部から非常になだらかに底部に至る。深さ20cmを測る。遺物は出土しなかった。

S K - 13 (第21図 図版11) E - 3 区で検出した細長い不定形な土坑である。その規模は長さ3.5m、幅1.3mを測るが、上部を道路で削平されているため本米は各々3.7m、1.5m以上あったとみられる。深さは0.6m程である。南北断面をみると埋土は漆黒色粘質土(上層)、茶褐色粘質土(中層)、灰色粘質土(下層)に大別でき、遺物は認められなかった。



第21図 S K - 13、S D - 2 平面図・断面図

S P - 4 (第20図 図版18)

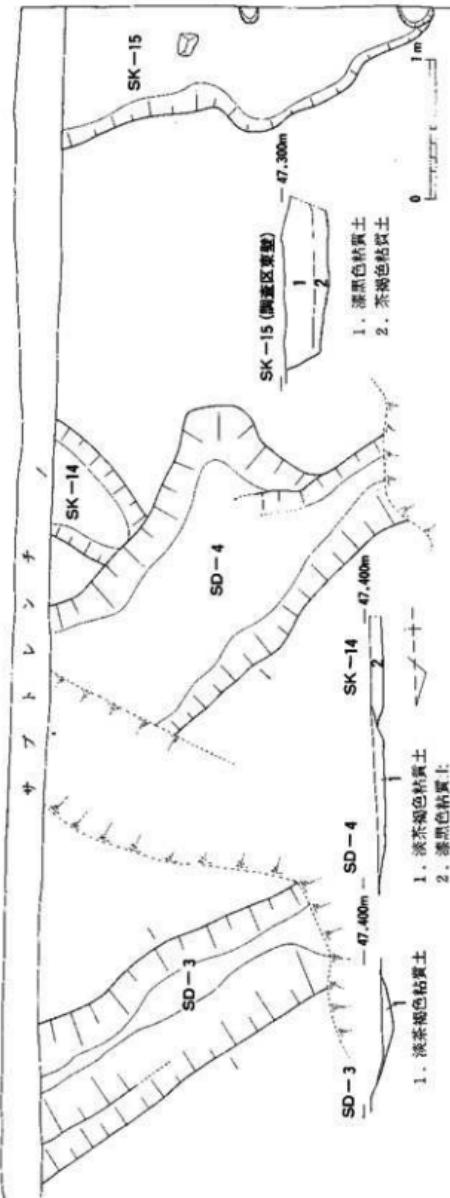
D - 3 区の SK - 11 の北方で検出した。長さ1.0m、幅0.5mの細長いピットである。深さは5cm程度で埋土は漆黒色粘質土である。ピットの中央には15~20cm程のやや扁平な石を集積する部分が認められたが、焼けた痕跡などは見られなかった。なおこのピットは、SD - 9、SK - 11と方向が一致する点から亦生前期と推定した。

S D - 2 (第21図) F - 3 汎  
北方で3.5mにわたって検出した弧状に走る幅0.5~0.8mの溝で両端部は道路によって削半されている。様面から緩やかに底面に続き、深さは5cm程度で概して浅いが溝中央付近のみ15cm程を測る。埋土は上下2層に分層でき、各々漆黒色粘質土、灰色粘質土である。

黒色粘質土上面の遺構

黒色粘質土(第3層)上面(遺構面II)の遺構は、調査区東端部の溝と、西半部のピット群に大別できる。それらの遺構の時期はベヌスとなる黒色粘質土から、6世紀頃の須恵器がわずかながら出土しており、それ以降のものと考えられる。

S K - 14 (第22図) 北西~南  
東に主軸をとる深さ5cm程の浅い土坑で、北西端部は SD - 4 に  
切られ、南東部は調査区外に伸び



第22図 SK - 14・15、SD - 3・4 平面図・断面図

るため、全容は明らかにし得なかったが、検出長1m、幅0.7mを測る。

S K - 15 (第22図 図版19) 調査区の南東端で検出した不定形の土坑で、大部分は調査区外に伸びるため、全容は明らかにし得なかったが、検出長2.6m、幅0.9m、深さ0.1mを測る。埋土は大きく2層に分かれ、上層は漆黒色粘質土で、下層は茶褐色粘質土である。

S D - 3 (第22図 図版19) 北東から南西方向に続く溝で、南西部は後世の擾乱によって切られ、北東は調査区外に伸びるため全容は明らかにし得ないが、検出長2.7m、幅1.0mを測る。深さは10cm程度で、明確な底部もつくり出さないくぼみ状の溝である。

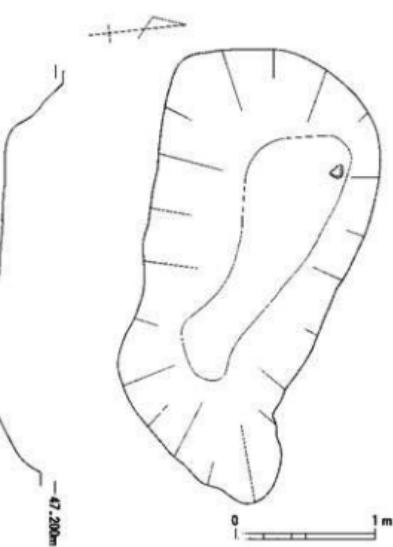
S D - 4 (第22図 図版20) 北東から南西方向に伸びる溝で両端とも後世の擾乱によって削平されている。検出長3.0m、幅1.4mを測るが、南東端部は急に幅を減じて0.6mになる。

これら東端部の遺構は、漆黒色粘質土を埋土とする S K - 14・15 と、淡茶褐色粘質土の S D - 3・4 に大別でき、切合い関係から後者の方が新しいことは明らかで、特に、S D - 3・4 はほぼ平行することから、同時期のものと見てまず間違いないであろう。ただ、先述したよう古墳時代以降の遺構であること以外は時期決定の決め手を欠く。

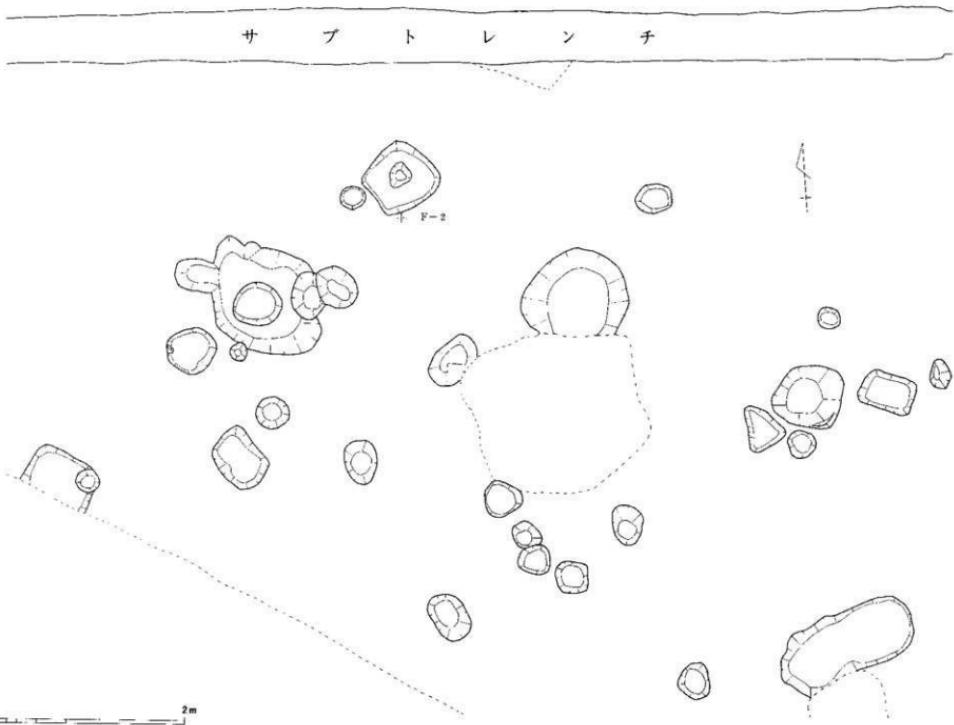
西方ピット群 (第24図 図版20) E - 2 付を中心約30ヶ所のピットを検出した。これらのピットは、直徑40cm、深さ15mの円形もしくは隅丸方形を呈し、深さは15cm前後と浅い。埋土はベース土(黒色粘質土)による似ており、ベース土よりやや暗い程度である。これらのピットは埋土中から遺物の出土をまったく見ず、人為的なものでない可能性も強い。

#### 時期不明の遺構

S K - 16 (第25図) B - 2 杵のすぐ北にある土坑で、黒色粘質土を除去した段階で検出した。北端部は調査区外に伸びるため全容は明らかではないが、検出長1.4m、幅0.8mを測り、本来は長さ1.8m程度で、底部は平坦である。断面を詳細に観察すると、縄文時代中期以前の遺構と考えられる S K - 3 の埋没後に堆積した茶褐色粘質土の上面から切り込んでいる点、あるいはその茶褐色粘質土中から縄文土器とみられる細片が出土している点から考えて、縄文時代中期以降の遺構であることは間違いない。また、埋土は漆黒色粘質土～暗茶褐色粘質土であり、弥生時代前期の遺構と変わるもの



第23図 S K - 17 平面図・断面図



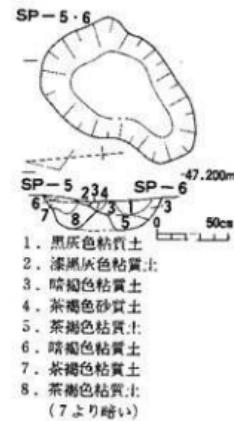
第24図 西方ピット群平面図

ではないが、灰色粘質土が認められないため時期について  
は保留した。

S K - 17 (第23図) 調査区西部のF-1～2区で検出  
した土坑で、黒色粘質土を除去した時点での確認した。全長  
3.2m、幅1.6m、深さ0.6mを測り、断面観察用アゼが降雨等で崩壊したため、埋土は充分観察できなかったが、全体に黒色粘質土が堆積し、かなり礫が混在していた。これは先述したように、付近の地川自身が調査区東半部に比べ、  
礫を多く混在していることが影響しているとみてよいだろ  
う。遺物は認められなかった。

S K - 18 (第9図) D-1区に存在する円形の土坑で  
直径0.9m、深さ20cmを測り、南半部はS X - 4を切って  
いる。埋土は礫混りの黒灰色粘質土で、遺物は確認しなかっ  
た。

S P - 5・6 (第25図) 調査区の西端近く、G-3杭  
のすぐ東で検出したピットである。平面では両者の切合  
をおさえることができず、断面でそれを確認した。そのため各々の平面形・規模は充分把握できなかったが、S P -  
6は長さ1m程の梢円形になるとされる。S P - 5の方  
が大きい。上部を近年までの道路で削平され、そのベース  
面は確認できなかったが、埋土は两者とも茶褐色系の粘質  
土である。



第25図 S K - 16、S P - 5・6  
平面図・断面図

## V. 遺 物

今回の調査では、縄文土器、弥生土器、須恵器などが各々少量ずつ出土した。

### 縄文土器（第26・27図 図版21・22）

縄文土器の出土はSK-4・5にはば限られ、その数50余片にのぼる。特にSK-4の2ヶ所から集中して出土している（第11図）。以下では出土状況も考慮しつつ、縄文土器の文様と施文方法に観点を置き、新たに分類を試みた。なお、土器の色調、胎土等については土器観察表に明記した。

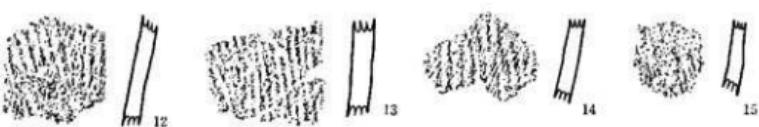
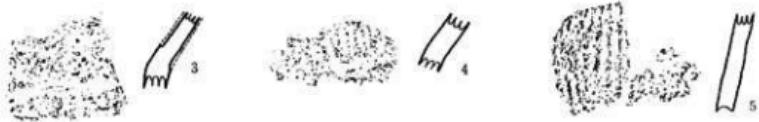
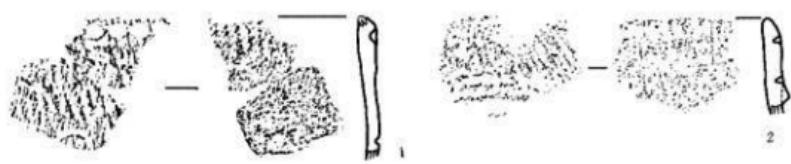
第1類（第26図1 図版21）は節の中に繊維痕が観察される横位施文縄文Rを地文とし、口縁端部に径6mm前後の円形刺突H痕、口縁部に径14mm前後の円文を施す土器である。口縁端部円径刺突H痕下位には縦位に条線が擦過されている。内面は横位施文縄文Rを口縁端部下約2cm間に施し、調整は丁寧な横位ナデである。器形は緩やかに開くキャリバー形と考えられる。SK-5上層より出土した。

第2類（第26図2～18 図版21）は横位施文縄文Rを地文とし、口縁部に凸帯を弧状に施し、その上側面には、ヘラ状工具による連続刺突文が施されている土器である。内面は横位施文縄文Rを口縁端部下約2cm間に施されている。器形は緩やかに内湾するキャリバー形と考えられる。第1・3類に比べると器壁が厚く、色調・胎土も異なる。3：4・7・8はSK-4北部、9・18はSK-5、10・11はSK-4中央部と比較的まとまって出土し、各々同一個体と思われる。10・11は結晶片岩を混入する。なお、8・9は擬口縁逆形・擬口縁を有する。

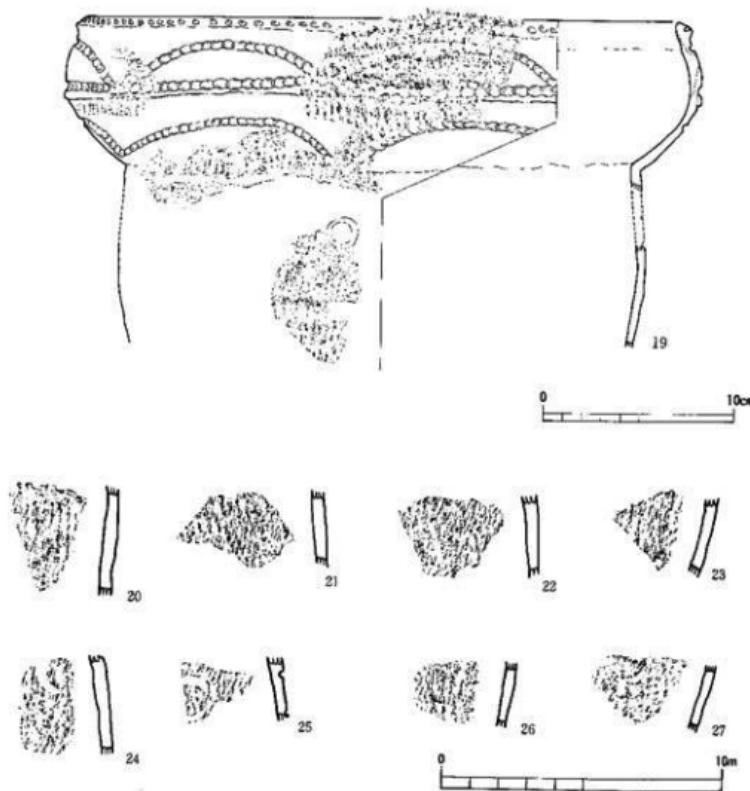
第3類（第27図19～27 図版28）は口縁部に竹管押引き文と貼り付け凸帯文を施す土器。復元口径30.7cmを測るキャリバー形の平線口縁をなす深鉢で、口縁端部に入角15°前後の刺突文を施す。口縁中央部に凸帯を横位に貼り付け、その上側面端部には凸帯に平行して竹管外側面による押引き、その上部には同技法による弧線文を施す。また頸部から口縁部には同技法で半截竹管内側面による断続的横位沈線を地文とする弧線文が施されている。この二つの弧線文は共に同調する。胸部は横位施文縄文Rを地文に、復元径約1.6cmの竹管状円形沈線文が施されている。内面は全体的に入念なナデ調整。器壁は4～5mmである。20～27は同一個体の可能性を考えられる。SK-4中央部より出土した。

本遺跡出土の縄文土器に関しては、前述したとおり滑位的な検討の上に立っての時期把握は困難であった。しかし型式学的検討により時期比定を行うならば、中期前葉期に位置付けることができる。

第1類は、粗く硬い繊維による縄文地に、口縁端部に円形刺突列をもつ土器で、間壁編年船元II式B類、賀編年第III群第1類に相当するものと考えられる。類品として磯山城・栗津（滋



第26図 繩文土器実測図 (第1・2類)



第27図 桐文土器実測図（第3類）

賀)、吉礼貝塚<sup>61</sup>(和歌川)をみる。最近、船元II式B類を船元I式の範疇で理解するという両示<sup>62</sup>もなされており、内面の縄文帯、器壁の薄さ、口縁端部の形状より船元I式でも新相を帯びたものとして理解したい。

第2類は、胎土、器壁の厚さからやや異質のものであるが、凸帶、刺突文などから第1類と時期的に併行するものと考えられる。

第3類は、口縁部に半截竹管による弧線文・平行沈線文を施した土器で、島(鳥取)、礪山城<sup>63</sup>(滋賀)、大石<sup>64</sup>(長野)で類例を見る。大石遺跡第36号住居址埋土の遺物は、共伴関係より船沢式から新道式への移行期とされている。中部地方中南信では船元式系土器と中部地方中期前東上器との伴生関係がみられ、船元II式が九兵衛尾根I式終末から伴出し、下限が新道式ま

第1表 楚文土器觀察表

遺物番号	器種	部	位	色調(外面・内面)	輪	I.	II.	III. 土 地 点	IV. 土 地 点	備考
								S K - 5 上層	S K - 4 中央部土器出土地点	刺突、沈線、鶴文(R) 檻位
第26図・1	深鉢	口縁	部	5YR5/8 • 5YR5/6	長石、石英、チサトト合					
2	深鉢	口縁	部	7.5YR5/8~7.5YR6/8	長石、石英、チサトト合	S K - 4 中央部土器出土地点				
3	深鉢	側	部	5YR5/6 • 5YR4/4	長石、石英、チサトト合	S K - 4 北端部土器出土地点				
4	深鉢	側	部	2.5YR4/4 • 5YR5/3	長石、石英、チサトト合	"				
5	深鉢	胸	部	5YR5/8 • 7.5YR6/6	長石、石英、チサトト合	S K - 5 上層				
6	深鉢	側	部	5YR5/3 • 7.5YR5/4	長石、石英、チサトト合	S K - 4 中央部土器出土地点				
7	深鉢	胸	部	5YR5/6 • 5YR4/4	長石、石英、チサトト合	S K - 4 北端部土器出土地点				
8	深鉢	側	部	5YR5/6 • 5YR4/4	長石、石英、チサトト合	"				
9	深鉢	胸	部	5YR5/8 • 2.5YR5/8	長石、石英、チサトト合	S K - 5 上層				
10	深鉢	側	部	5YR5/8 • 7.5YR5/6	長石、石英、粘晶片岩合	S K - 4 中央部土器出土地点				
11	深鉢	胸	部	5YR5/8 • 7.5YR5/6	長石、石英、粘晶片岩合	"				
12	深鉢	側	部	7.5YR5/4 • 5YR5/3	長石、石英、チサトト合	"				
13	深鉢	胸	部	5YR3/2 • 7.5YR4/1	長石、石英、チサトト合	S K - 5 上層				
14	深鉢	側	部	5YR5/8 • 7.5YR5/6	長石、石英、チサトト合	"				
15	深鉢	胸	部	7.5YR3/3~7.5YR5/2	長石、石英、チサトト合	S K - 4 中央部土器出土地点				
16	深鉢	胸	部	7.5YR5/4~7.5YR5/8	長石、石英、チサトト合	"				
17	深鉢	胸	部	5YR5/6 • 7.5YR5/2	長石、石英、チサトト合	"				
18	深鉢	側	部	7.5YR5/6 • 5YR5/8	長石、石英、チサトト合	S K - 5 上層				
第27図・19	深鉢	口縁~側部	部	5YR3/4 • 5YR4/6	長石、石英、チサトト合	S K - 4 中央部土器出土地点				
20	深鉢	胸	部	5YR5/8 • 5YR3/4	長石、石英、チサトト合	"				
21	深鉢	側	部	5YR5/6 • 5YR4/6	長石、石英、チサトト合	"				
22	深鉢	胸	部	5YR4/8 • 5YR4/6	長石、石英、チサトト合	"				
23	深鉢	側	部	2.5YR4/6 • 5YR4/6	長石、石英、チサトト合	"				
24	深鉢	胸	部	5YR3/4 • 5YR4/6	長石、石英、チサトト合	"				
25	深鉢	側	部	5YR3/4 • 5YR4/6	長石、石英、チサトト合	"				
26	深鉢	胸	部	5YR5/6 • 5YR4/6	長石、石英、チサトト合	"				
27	深鉢	側	部	5YR4/8 • 5YR4/6	長石、石英、チサトト合	"				

でと考えられる。このことから考えると船元II式が少なくとも二型式に細分される要素をもっていると思われる。この第3類土器は、施文技法の点から里木貝塚において酷似する資料を抽出することができないが、口縁端部内面には船元I式のメルクマールでもある網文帯が施されておらず、船元I式にみられる内側部段状整形も退化した形状を示す。また文様構成も口縁部に集約している点から船元II式の範疇として理解したい。

以上、第1～3類土器について時期比定をおこなったが、量的に少量で中期前葉期の検討を行いうまでには至らなかった。最後に本遺跡周辺での中期段階の遺跡を列挙しておく。野畠遺跡（鷹島式）、原田西遺跡（船元II式）、大阪空港A地点、有岡城第17次調査地点。

#### 弥生土器（第28図）

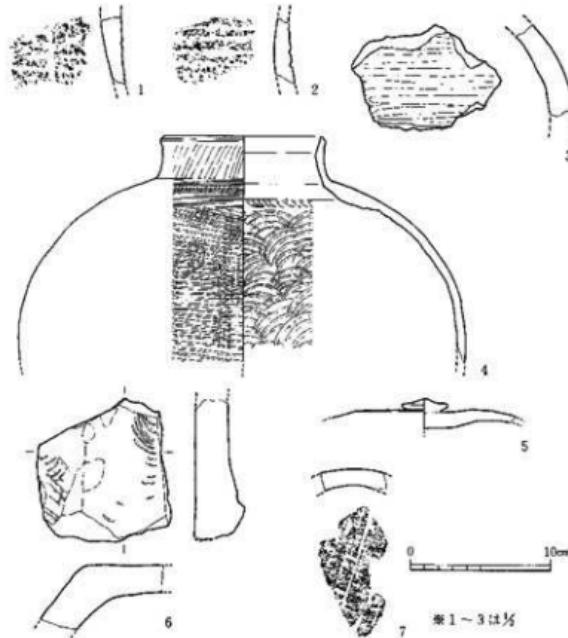
弥生土器はSK-7束半部の漆黒色粘質土内より約60片が出土したが、細片のため図示し得るものは少ない。1は壺の頸部と思われ、黄褐色を呈し4条のヘラ描沈線がめぐる。2は壺あるいは甕の頸部と思われ、明黄褐色を呈し4条のヘラ描沈線が認められる。3は壺の体部上半部で、内面は黄褐色、外面は茶灰色を呈する。外面にはヘラミガキが施され、外向下端は黒斑が残る。

これらの土器はヘラ  
描沈線が4条認められ  
るため、畿内第1様式  
新段階のものと考えら  
れる。

#### 須恵器他（第28図 図 版22）

第3層および堆土中  
より古墳時代以降の遺  
物が若干出土した。

4はA-3区第3層  
より出土した須恵器直  
口壺である。復元口径  
11.8cm、体部最大径  
32.0cm、残存高16.6cm  
を測り、球状の体部に  
短く直口する口縁部が  
続く。外面は縦方向後、  
横方向の平行タタキを



第28図 弥生土器・須恵器他実測図

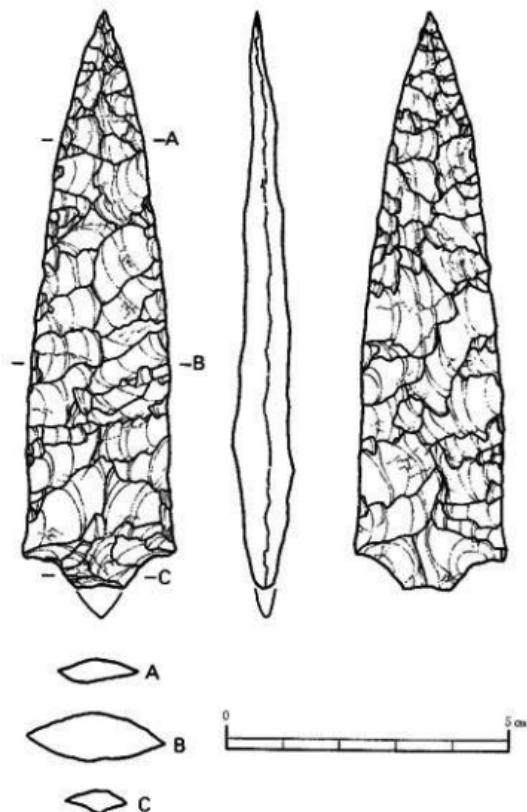
行ない、その上からカキメを施す。内面は同心円文を残し、頭頂～体部上半外側には工具痕が残る。5は耕土中より出土した須恵器杯蓋である。直径3.3cmの擬宝珠状のつまみがつく。4・5は概ね桜井谷編年のII型式中漬（3～4段階）、2は図示しなかつたが、かえりを有する杯蓋の口縁端部が出土していることを考えあわせると、III型式後半段階に相当すると思われる。

6は耕土中より出土した須恵器の上製品で残存長10cm、最大厚3.5cmを測り、外側に平行タタキおよび同心円文が認められ内面には指ナデを施す。内外面とも表面は灰色であるが、内部は淡黄灰色を呈する。陶棺片の可能性が強い。なお、北方約700mには陶棺を内部主体とする太波塚古墳があり、当遺跡の周辺にも同様の古墳が存在したことが推測できる。

7は耕土より出土した瓦片である。残存長9.5cmで内外面とも表面は黒色で内部は灰色を呈する。内面には布目痕が残り、丸瓦の可能性が高い。

有舌尖頭器（第12・29図  
卷頭図版 図版23）

SK-4の埋没後に掘削された溝状遺構内より有舌尖頭器が1点出土した。サヌカイト製で、現長10.3cm、最大幅2.7cm、最大厚1.0cm、現重23.4gを測る。先端部は鋭い。左右両側線は、緩やかにふくらむ弧状を呈するが両側線とも下半部でややしぶり込まれている。最大幅は逆刺部両端部間にあり、逆刺は両側とも舌部間にわずかな抉れ部を形成する。舌部は、端部を古く折損しているが、本来は二等辺の逆三角形状をしていたと思われる。

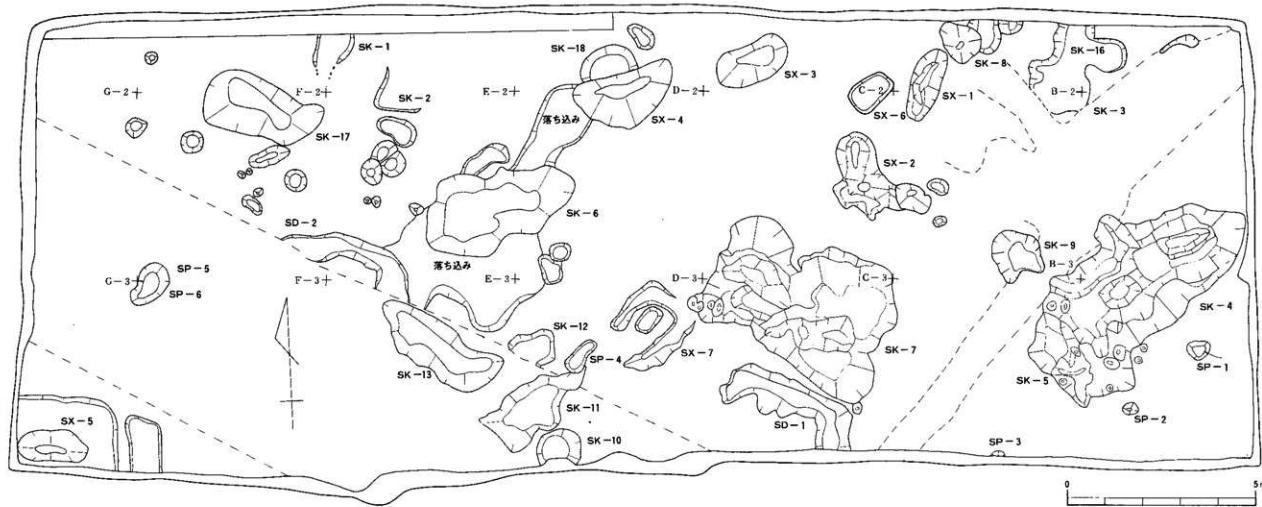


第29図 有舌尖頭器実測図（原寸）

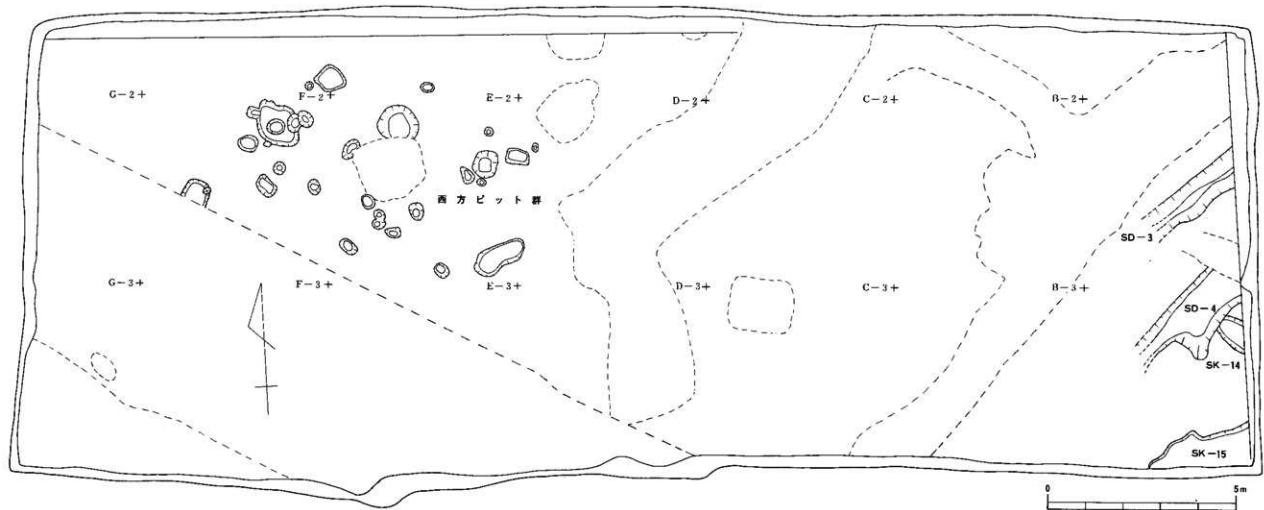
器表は、やや強く同化して灰白色となり、剥離面等の観察には困難があるが、表裏両面ともほぼ全面に斜行状平行別離による器形の微調整が施されている。

全く共半遺物は認められなかったが、その形態から縄文時代草創期のものと見てよいだろう。

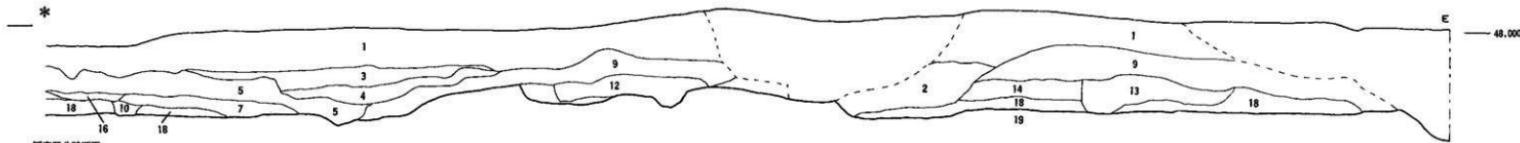
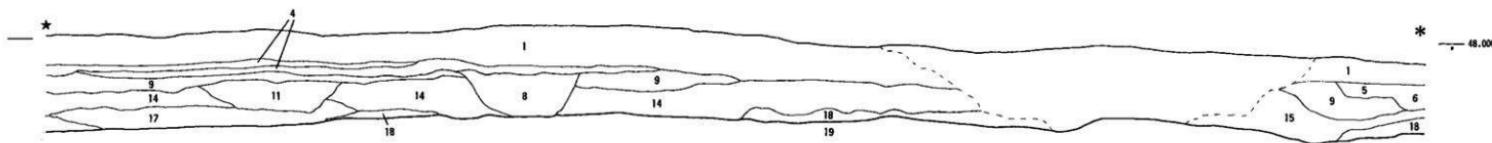
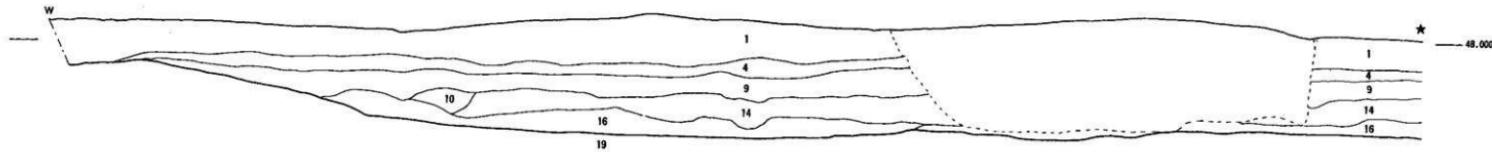
- 註1) 佐原 真「土器の用途と制作」『日本考古学を学ぶ』2 有斐閣1979
- 2) 間壁忠泰・間壁貢子『里木貝塚』(倉敷考古館研究集報第7号) 1971
- 3) 賀二郎・中村貞史『魔島遺跡発掘調査報告書』広川町教育委員会 南紀考古同好会 1969
- 4) 中井 均『鏡山城跡』米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 米原町教育委員会1986
- 5) 泉 拓良「栗津遺跡の出土遺物」『遺跡確認法の調査研究 昭和55年度実施報告一水中遺跡の調査』 文化庁1981
- 6) 中村貞史「縄文時代の遺跡と遺物」『和歌山県の研究』1-地質・考古編一 清文堂1979
- 7) 久保廣二郎他『鳥遺跡発掘調査報告書第1集』北条町埋蔵文化財報告書2 北条町教育委員会 1983
- 8) 横口昇・「大石遺跡 縄文中期前半における移入土器」『長野県中央近埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一茅野市・原村その1・富士見町その2』日本道路公団名古屋建設局 長野県教育委員会1976
- 9) 橋本正幸氏の御教示による
- 10) 烏田義明・橋本正幸・柳本昭男『原田西遺跡』豊中市文化財調査報告第7集 豊中市教育委員会1981
- 11) 佐原 真「考古学からみた伊丹地方」『伊丹市史』第1巻 伊丹市教育委員会1971
- 12) 藤井直正・川口宏海『有岡城跡と伊丹郷町』大手前女子学院有岡城跡調査委員会1986
- 13) 木下 亘「浜津桜井谷占黒跡群における須恵器編年」『桜井谷黒跡群2-17黒跡-府立少路高等学校建設工事に伴う調査報告一』少路黒跡調査報告書1982.12
- 14) →註13)



第30図 第1選択面全体図



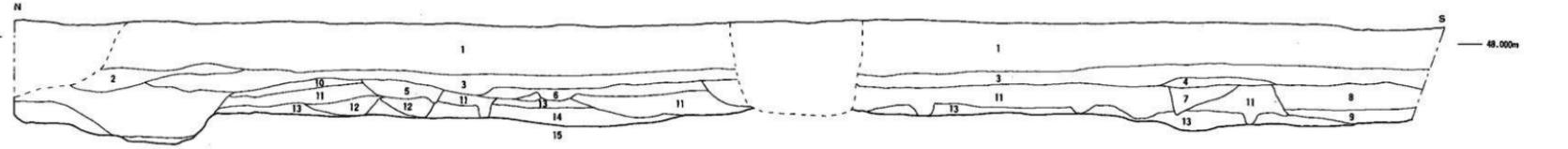
第31図 第II遺構面全体図



調查区北壁断面

1. 黄土
2. 黄褐色砂质土
3. 绿青灰色砂质土(第1層)
4. 绿青灰色粘质土(第1層)
5. 淡青褐色粘质土(第1層)
6. 绿青灰色粘质土(第1層)
7. 黄褐色砂质粘土
8. 黄褐色砂质土
9. 绿青灰色粘质土(第2層)
10. 黑色砂质土
11. 淡黄褐色砂质土
12. 黑色粘质土(黄褐色土を多く含む)
13. \*
14. \*
15. 淡青褐色砂质土(第3層)
16. 淡黄褐色砂质土
17. 淡黄褐色粘质土
18. 淡黄褐色粘质土(第4層)
19. 淡黄褐色粘质土(地山 第5層)

N



調査区東壁断面

1. 黄土
2. 黄褐色粘质土
3. 绿青色粘质土(第1層)
4. 黄褐色粘质土
5. 淡黄褐色粘质土
6. \*
7. 淡黑色粘质土
8. \*
9. 黄褐色粘质土( \* )
10. 淡黑色粘质土
11. 黑色粘质土(第3層)
12. 淡黄褐色粘质土(第4層)
13. 淡黄褐色粘质土(第4層)
14. \*
15. 淡黄褐色粘土(地山 第5層)

第32図 調査区断面図

# VI. 野畠春日町遺跡の遺構に残存する脂肪の分析

帯広畜産大学畜産環境学科 中野益男

北海道測量団工社総合科学研究所 長田正宏 福島道広 中野寛子

すべての動植物は体内に脂質（脂肪）を持っている。その主成分の脂肪酸には、炭素の鎖がまっすぐにのびた飽和のもの（バルミチン酸、ステアリン酸など）と、炭素の鎖の途中に二重結合をもつ不飽和のもの（オレイン酸、リノール酸など）がある。前者は、分子の形が秋田名物きりたんぽのような棒状をしている。棒状脂肪酸が多い脂肪は固状になりやすい。獣肉・食肉脂がこれに属する。これに対して後者は途中で折れ曲って弓状になっている。弓状脂肪酸の多い脂肪は、分子がいびつなので液状になりやすい。植物油や魚油がこれに属する。このように脂肪の形状は動植物種ごとに異なる。この形状の違いは、脂肪を構成する脂肪酸の種類が少しずつ異なっていることに由来している。脂肪の中のステロールも、脂肪酸と同じように種によつて異なる。動物はコレステロールで90%以上を占める単純な組成になっている。植物の主要なステロールはシトステロールで、その他に脂肪酸と同じ位の数のステロールを持っている。

最近、こうした脂肪は微量ながら長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した。<sup>1)</sup>従って、考古学資料から取り出されてきた脂肪の脂肪酸およびステロール組成を現生資料の持つ組成と照合することで、“脂肪の持主”を特定することができる。この「残存脂肪分析法」を用いて、野畠春日町遺跡の遺構の性格を解明しようとした。

## 1. 遺構資料

資料は、SX-1の5地点（1～4層。なお、2層は土坑底部と北壁部から採集し、各々、底部2層、北壁部2層と呼称する。）、SX-5の1地点、SK-4の3地点（D-D'断面の1・2・12層）、SK-5の1地点（C-C'断面の1層）、SX-6の1地点、SK-7の3地点（1・5・11層）および遺構外地山の3地点（D-2区のSK-6東側、調査区北西隅、向南東隅で、各々B-1、2、3と呼称する。）で、各々0.5～1.0kg採取した。

## 2. 残存脂肪の抽出

土壤資料約0.5～1.0kgに3倍量のクロロホルム-メタノール（2:1）混液を加え、超音波充満浴槽中で30分間処理して残存脂肪を抽出した。

残存脂肪の抽出量を第2表に示す。残存脂肪抽出量は0.0009～0.0069%、平均0.0029%で全国各地の遺跡土壤から抽出された残存脂肪の平均0.02%<sup>2)</sup>と比較して低かった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪種は遊離脂肪酸が最も多く、

次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリグリセリド、ステロールの順に多く、これらで残存脂肪の約86%以上を占めていた。その他に微量のステロールエステル、長鎖炭化水素および原点に留まる複合脂質を検出した。

### 3. 残存脂肪の脂肪酸組成

遺構の残存脂肪に5%メタノール性塩酸を加え、125°Cで2時間封管中でメタノール分解し、生成した脂肪酸メチルエステルを分離する。これをケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した。<sup>3)</sup>

残存脂肪の脂肪酸組成を第33図～第35図に示す。残存脂肪から13種類の脂肪酸を検出した。このうち、バルミチン酸(C16:0)、バルミトレイン酸(C16:1)、ステアリン酸(C18:0)、オレイン酸(C18:1)、リノール酸(C18:2)、アラキジン酸(C20:0)、エイコサモノエン酸(C20:1)、ベヘン酸(C22:0)、エルシン酸(C22:1)、リグノセリン酸(C24:0)、ネルボン酸(C24:1)など11種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー質量分析で同定した。

土坑と土坑外の脂肪酸組成を比較した。遺構外資料B-1を除き、2と3の脂肪酸組成はバルミチン酸(中級脂肪酸)が最も多く、次いでオレイン酸(中級不飽和脂肪酸)で、アラキジン酸など炭素数20以上の高級飽和脂肪酸は少なかった(第34図)。これらの資料はいずれも一般土壤によく見られる植物腐植に由来する脂肪酸パターンを示していた。これに対し、遺構外資料B-1の脂肪酸組成はオレイン酸がもっとも多く、次いでバルミチン酸が多い。この脂肪酸パターンは、植物腐植以外に植物油脂または動物体脂肪が混入していることを示唆している。SK-7埋土中、土坑上位(SK-7・1層)は遺構外資料B-3とよく似た脂肪酸パターンを示していたが、土坑中位(SK-7・5層)底部(SK-7・11層)で相対的にオレイン酸が増加していた。しかし、高等動物の脳、腎、脾、肝の臓器で特徴的に検出される高級脂肪酸のリグノセリン酸は、ほとんど検出されなかった(第33図)。SX-1埋土中、土坑上位資料のSX-1・2層北斜面は遺構外資料B-3と類似し、植物腐植由来の脂肪酸パターンを示し、同じ土坑上位のSX-1・1層はオレイン酸の占める割合が最も高かった(第34図)。土坑中位(SX-1・2層底部)および土坑底部(SX-1・3層、SX-1・4層)は、遺構外土壤資料と少し異なる脂肪酸パターンを示し、オレイン酸の占める割合が相対的に高く、植物遺体および動物遺体の体脂肪・骨油に近かった。しかしアラキジン酸以上の高級脂肪酸はSX-1・2層北斜面を除き少なかった。SK-4南北アゼとSX-5土坑は一部の土壤資料(SK-5・1層)を除きよく似た脂肪酸パターンを示し、バルミトレイン酸と高級脂肪酸の占める割合が高かった。バルミトレイン酸の高い分布は、不飽和脂肪酸の一部が酸化分解していることを示唆している。SK-6は、SK-7およびSK-1土坑底部の脂肪酸パターンと類似していた。

これらの成績から、SK-7、SX-6およびSX-1の底部に植物腐植以外の異種脂肪酸の存在が推定された。しかし動物遺体の臓器に特異的に検出される高級脂肪酸が少ないとから、動物遺体を直接土葬したことを示す証拠は見られなかった。

#### 4. 残存ステロール組成

遺構内外に残存する脂肪からステロールをケイ酸薄層クロマトグラフィーにより分離・精製後、アセテート誘導体にしてからガスクロマトグラフィーにより分析した。

残存脂肪の主なステロール組成を第36図～第38図に示す。残存脂肪から10～11種類のステロールを検出した。このうち、コレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど11種類のステロールをガスクロマトグラフィー質量分析計で同定した。いずれの資料も植物由来のシトステロールが20～60%近くを占めていた。これらのステロールのうち、動物に固有のコレステロールと植物に固有のシトステロールの比を第3表に示す。遺構外ステロール比は0.110～0.423の間にあり平均0.255を示した。遺構外の中では、B-1が0.423と高いことから、この対照地点周辺には動物遺体由来の脂肪が混入していたと推定される。これに対し、土坑等のステロール比は、SK-7底部(SK-7・11層)で0.995、SX-1上位(SX-1・1層)で1.612およびSX-1底部(SX-1・4層)で1.271と動物由来のコレステロールが高かった。これら十坑位置には、いずれも一般に動物遺体<sup>14)</sup>の存在を示唆する指標値の0.6以上に分布していた。また、SK-7については、土坑上位(SK-7・1層)および土坑中位のステロール比もそれぞれ0.547、0.521と遺構外よりも高い値を示していた。これらの成績から、SK-7およびSX-1には、動物遺体が存在していたと推定された。SK-4、SX-6およびSX-5は遺構外資料のステロール比の平均値よりも低い値を示したので、動物遺体存在の可能性は低い。

#### 5. 脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成を重回帰分析にかけ、相関行列距離を基にした群平均法によるクラスター分析の結果を第39図に示す。樹状構造図に見られるように、動植物脂肪酸、とくに動物性脂肪・骨油に近似した脂肪酸とステロールの痕跡が認められた十坑底部のSK-7・11層、SX-1・3層およびSX-1・4層はA群を形成し、植物腐植の影響を強く受けている土坑上位のSK-7・1層とSK-1・2層北斜面、SK-5・1層および遺構外B-3のB群とは距離は短いが互いに異なるコロニーを形成した。しかし動物性ステロールの低かったSX-6はA群に帰属していた。SK-7中位の5層はB群よりも動物性脂肪酸の痕跡のあるA群に近い距離のC群を形成した。SX-1十坑上位のSX-1・1は遺構外のB-1と類縁関係の深いD群を形成した。D群には、植物腐植以外の脂肪酸が混入していること、および1層に高いコレステロールが検出されることを考えると、A群と異なる系統樹に属するとはい、動物性遺体が存在していた可能性が高い。従って、B-1周辺にも遺構または動物遺体に類するもの

が分布していたと推測される。S X-5 および S K-4 はどの層位においても類縁関係の深い E 群を形成した。この群の脂肪酸組成は、一般的な植物腐植のそれと一致していたので、これらの遺構群には動物遺体は存在しないと推定された。S X-1 中位の底部 2 層は、他の土壤資料と全く別系統の F 群を形成していた。しかし脂肪酸パターンを見る限り底部 2 層は、植物腐植に類似し、この脂肪酸組成に異種脂肪酸が微量ながら混入していると推測される。異種脂肪酸の種類は不明。

#### 6. 脂肪酸組成による種特異性相間

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16のバルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキジン酸以降）との比を X 軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸の比を Y 軸にとり、種特異性相間を求めた。この比例配分により、第 1 象限と第 3 象限の原点から離れた位置に高等動物が分布し、第 2 象限から第 3 象限にかけての原点附近に植物と微生物、第 3 象限から第 4 象限に移る原点から離れた位置に海産動物が分布する。

遺構内外の脂肪酸組成から求めた相関図を第40図に示す。A 群の S K-7・11 層、S X-1・3 層および S X-1・4 層は第 2 象限と X 軸に沿った植物腐植に近い位置に広く分布し、F 群の S X-1・2 層底部は A 群の分布する範囲内に、C 群の S K-7・5 層は第 2 象限の Y 軸に沿って位置した。これらの領域は動植物の分布範囲と一致しないことから、動植物遺体両方の影響を強く受けていると推測される。A 群に属する土坑底部からは、動物性コレステロールが高く検出される。しかし、脳等の神経組織によく見られるベヘン酸、リグノセリン酸等の高級脂肪酸は少ない。埋葬形態が土葬の場合には、これらの物質が多く検出され、I 墓資料は第 1 象限の原点から離れた位置に分布する。A 群は第 1 象限に分布しないところから、I 坑内に直接遺体を埋葬した可能性は少ない。B 群の S K-7・1 層、S X-1・2 層北斜面、および S K-4 は遺構外資料 B-3 とともに Y 軸に沿った第 2 象限の離れた位置に分布した。これら土坑上位資料からは S K-7 を除き動物性コレステロールを全く検出しないことから、この層位に動物遺体は分布しない。E 群の S K-4 は植物腐植に近い位置に分布した。D 群の S X-1・1 層は、遺構外の B-1 とともに第 3 象限の原点から離れて位置した。この位置は、大阪府熊取町成合寺遺跡の焼土坑に見られる骨油の分布範囲とよく類似し、先の動物性コレステロールの検出ともよく一致した。S X-5 はこの D 群にも近かった。

S X-1 の場合、土坑の上位と底部の層位に分かれて動物性遺体の存在を示唆する動物性コレステロールを検出することから、時代の異なる土坑が分布していたのかもしれない。

これらの成績とクラスター分析およびステロール分析の結果を総合すると、S K-7 と S X-1 には動物遺体が存在していたと断定できた。しかし、I 坑内に直接遺体を埋葬したのではなく、骨葬の可能性が高い。

## 7. 総 括

5ヶ所の遺構群から採取した14土壤資料中6資料から動物性コレステロールを検出した。しかし、動物性脂肪酸は植物性脂肪酸等の異種脂肪酸の影響を強く受け、動物の存在を示す優位な脂肪酸を検出することができなかった。従って、ステロール分析と脂肪酸分析の結果は完全に一致しなかった。この遺構群中、SK-7およびSX-1の底部に比較的高濃度の動物性コレステロールと微量ながら骨油に近い脂肪酸を検出したことから、この土坑には高等動物に属する遺体が埋葬されていた可能性は高いと認定された。しかし、土葬形態を示唆する脂肪酸は土坑内から検出されなかった。SX-1では上位と底部から動物遺体の痕跡を認めることから、時代の異なる土壤墓が分布していた可能性もある。

### 参考文献

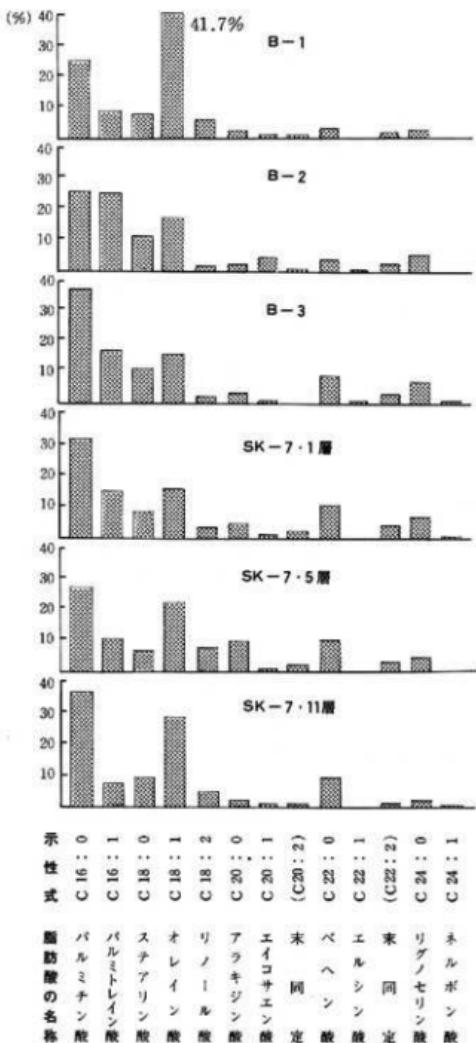
- 1) 中野益男「残存脂肪分析の現状」『歴史公論』第10巻(6) 1984 PP124
- 2) 中野益男・伊賀 啓・根岸 孝・安本教伝・畠 明宏・矢吹俊雄・佐原 真・山中 猶「古代遺跡に残存する脂質の分析」『歴史生物学研究』第26巻1984 PP40
- 3) M.Nakano and W.Fischer 「The Glycolipids of *Lactobacillus casei* DSM 20021」『Hoppe-Seyler's Z.Physiol.Chem.』358巻1977 PP1439
- 4) 中野益男・伊賀 啓・小林進介・根岸 孝「湯の里4遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」『湯の里遺跡群一津軽海峡線(北海道)建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書』北海道埋蔵文化財センター1985 PP223
- 5) 中野益男「配石遺構の土壤に残存する脂肪の分析」『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(1)』秋田県鹿角市教育委員会1985 PP46
- 6) 中野益男・中間利泰「配石遺構の土壤に残存する脂肪の分析」『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(2)』秋田県鹿角市教育委員会1986 PP113
- 7) 中野益男「熊取町成合寺遺跡の土壤群に残存する脂肪の分析」『近畿自動車道和歌山線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・(財)人蔵文化財センター1985 PP78

第2表 野畑春日町遺跡の遺構群の土壤資料採取位置と炭素抽出率

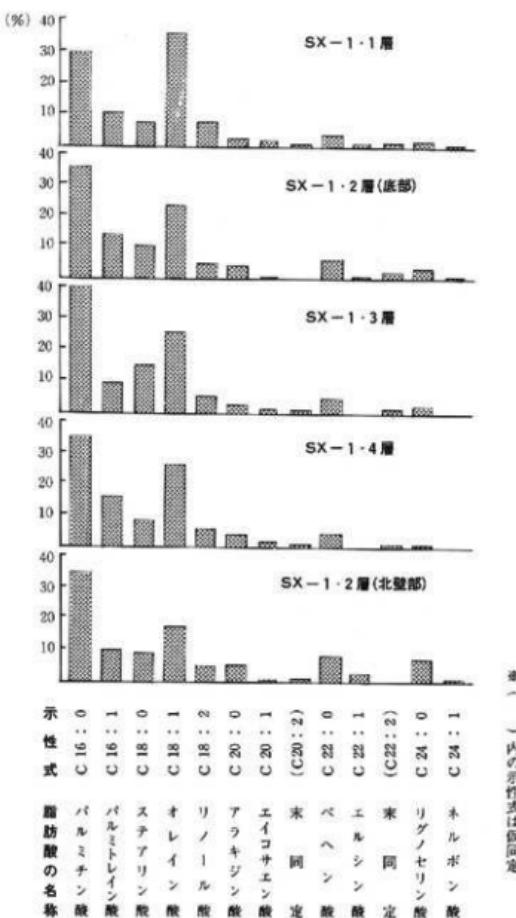
遺構内	構	層位	土壤重量(g)	抽出量(mg)	抽出率(%)	
					SK-4	SK-4
	SK-4	1層	765.00	51.4	0.0067	
	SK-4	2層	840.00	29.4	0.0035	
	SK-4	12層	550.00	38.2	0.0069	
	SK-5	1層	900.00	45.1	0.0050	
	SK-7	1層	667.79	19.5	0.0029	
	SK-7	5層	571.04	10.5	0.0018	
	SK-7	11層	666.74	8.8	0.0013	
	SK-6		789.31	28.6	0.0036	
	SX-1	1層	660.00	17.7	0.0027	
	SX-1	2層底部	900.00	8.7	0.0010	
	SX-1	3層	980.00	8.5	0.0009	
	SX-1	4層	950.00	9.2	0.0010	
	SX-1	2層北端	920.00	15.1	0.0016	
	SX-5		736.14	14.2	0.0019	
遺構外	B-1		567.18	120.9	0.0213	
	B-2		875.00	14.5	0.0017	
	B-3		999.00	12.5	0.0013	

第3表 土坑内外の土壤に分布するコレステロールヒシットステロールの割合

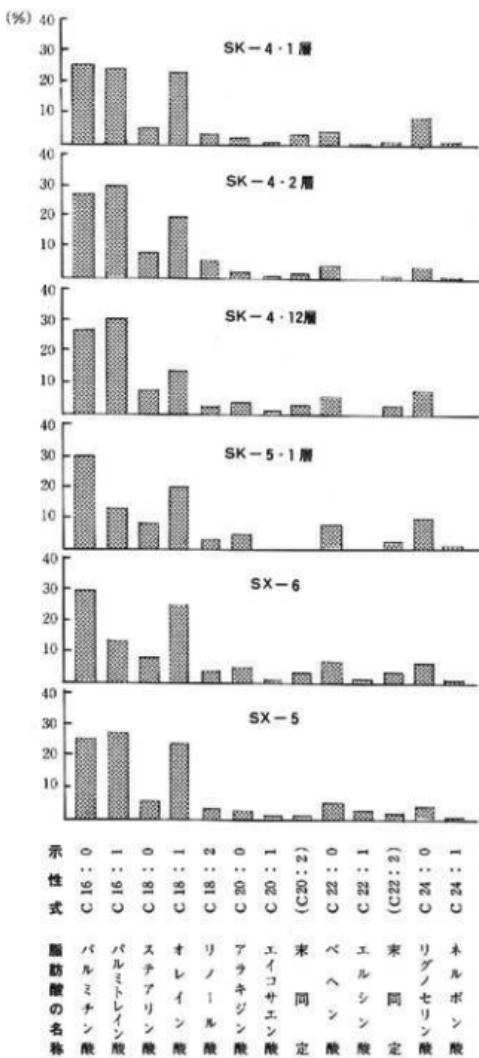
遺構内	SK-4	層位	コレステロール(%)		コレステロール/ヒシットステロール比
			コレステロール(%)	ヒシットステロール(%)	
遺構内	SK-4	1層	3.22	67.80	0.048
	SK-4	2層	3.65	61.76	0.059
	SK-4	12層	4.07	42.88	0.095
	SK-5	1層	5.06	25.71	0.197
	SK-7	1層	10.16	18.57	0.547
	SK-7	5層	19.82	38.01	0.521
	SK-7	11層	34.47	34.64	0.995
	SK-6		10.90	32.43	0.336
	SK-1	1層	28.55	17.71	1.612
	SK-1	2層底部	10.52	53.37	0.197
	SK-1	3層	16.51	58.53	0.282
	SK-1	4層	24.86	19.56	1.271
	SK-1	2層北端	3.59	65.25	0.055
	SK-5		14.15	30.41	0.465
遺構外	B-1		8.92	21.10	0.423
	B-2		8.94	38.75	0.231
	B-3		3.50	31.92	0.110



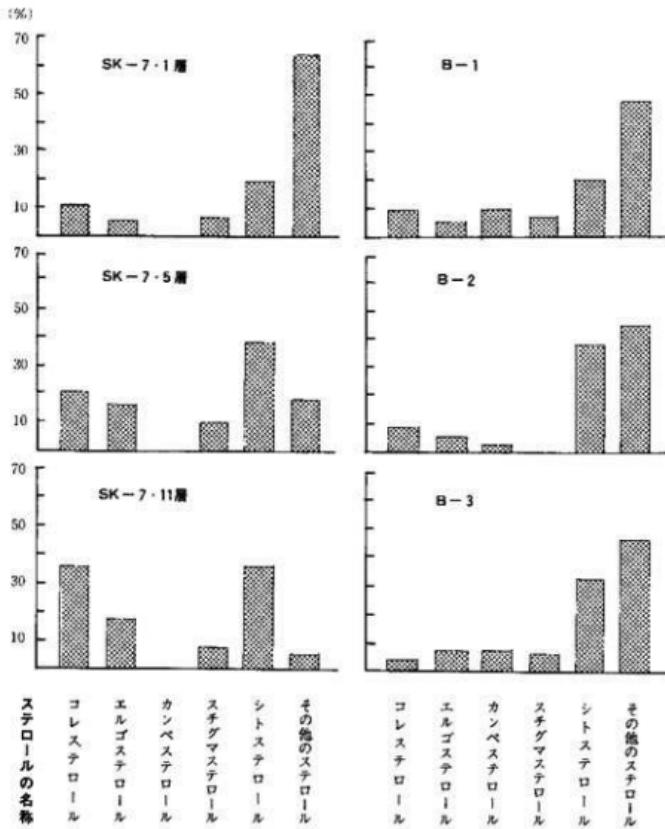
第33図 SK-7と遺構外に残存する脂肪の脂肪酸組成



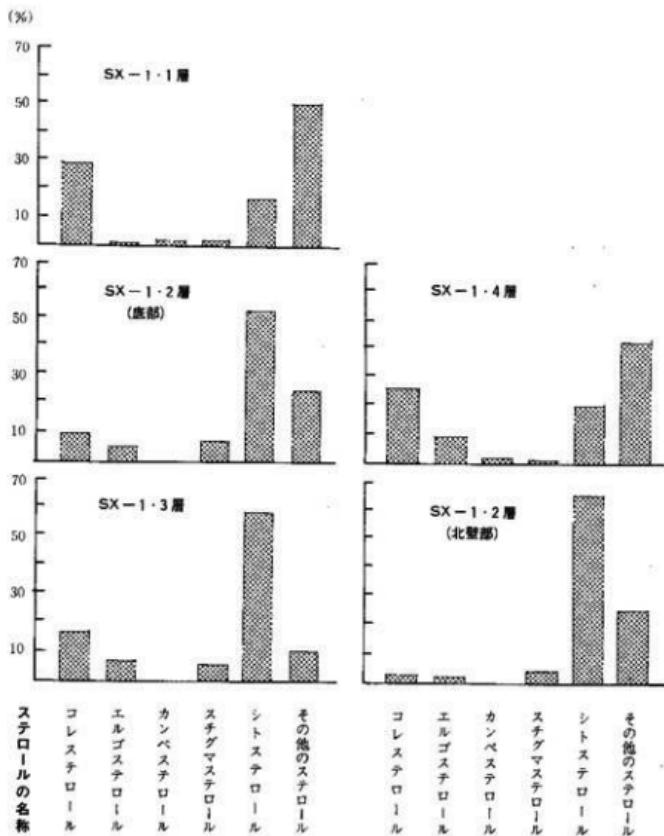
第34図 SX-1に残存する脂肪の脂肪酸組成



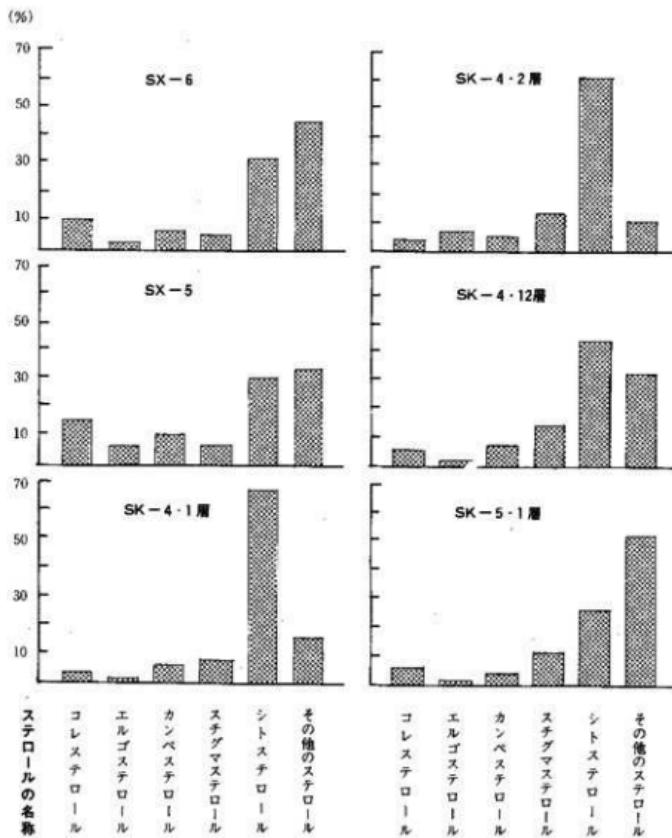
第35図 遺構群に残存する脂肪の脂肪酸組成



第36図 SK-7と遺構外に残存するステロール組成

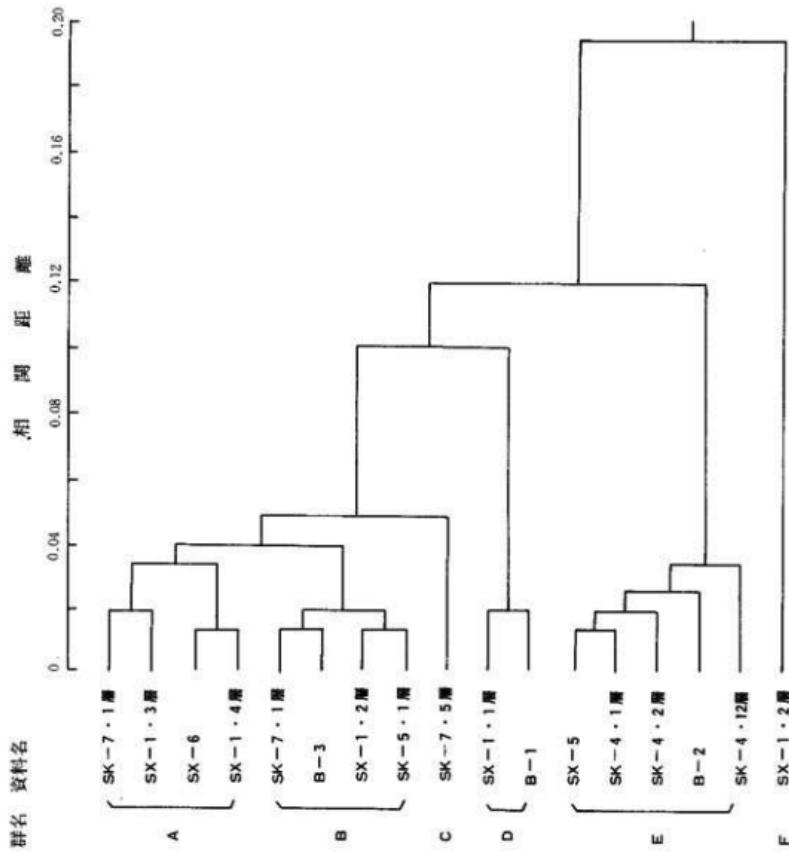


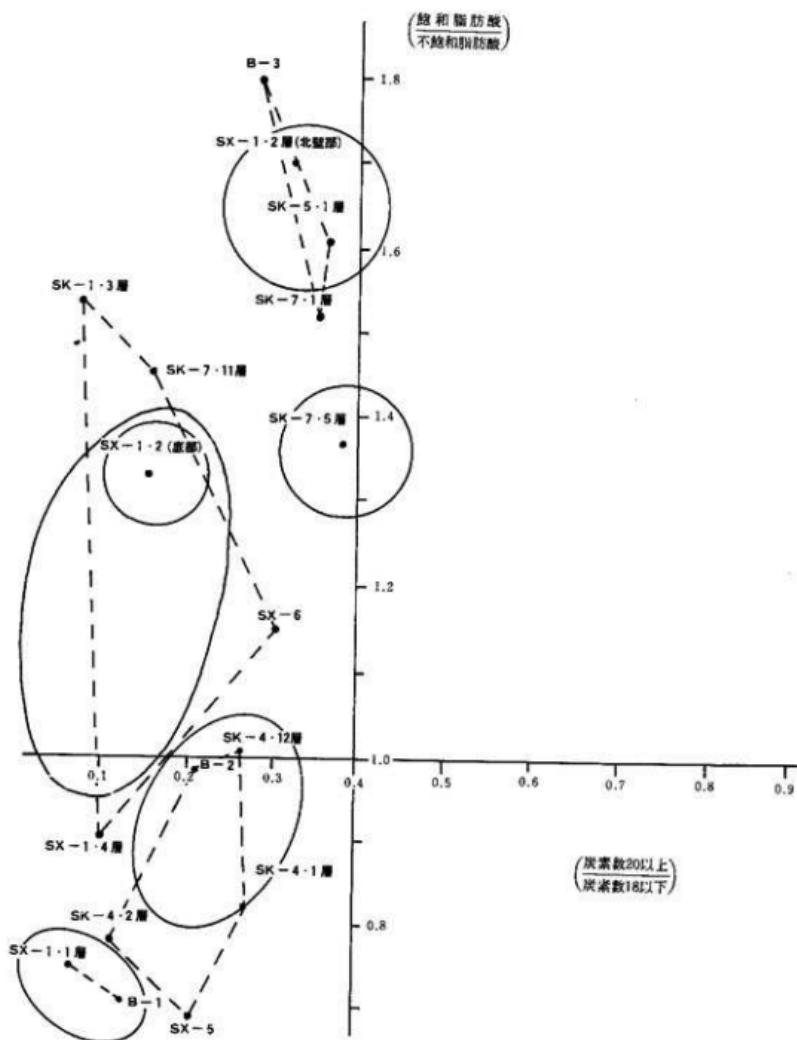
第37図 SX-1に残存するステロール組成



第38図 遺構群に残存するステロール組成

第39図 遊撲群内外の土壤に残存する脂肪酸組成樹状構造図





第40図 遺構内外の土壤に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

## VII. まとめ

野畠春日町遺跡は從来、弥生中期の高地性集落としてその存在が知られてきた。しかし、今回の調査で、主に縄文時代中期・弥生時代前期の遺構・遺物が検出された。以下、各時期について簡単にまとめてみる。

### 1. 縄文時代の土壙墓について

今回の調査では縄文時代中期のものと考えられる土壙墓を5基検出した。しかし、先述したように土坑内からの遺物の出土は皆無であることから、他の時期（例えば、弥生時代前期）の遺構である可能性も完全に捨て去るわけにはいかない。そこで、以下では近畿地方の他の遺跡例も参考にして若干の考察を行ってみたい。

規模・形態 今回検出した土壙墓はその規模から大きく二型式に分類できる。

第I類…長さ1.8~1.9m、幅0.8~1.0mを測るもの。SX-1・2・5

第II類…長さ2.0~2.7m、幅1.2~1.5mを測り、第I類に比べてやや大きめのもの。SX-3・4

第I類のSX-1・2と第II類のSX-3・4がほぼ主軸をそろえることから各類型間に何らかの関係があったことが考えられる。ただ、平面形は各墓壙ともかなり多様で、SX-1のような紡錘状を呈するものもあれば、SX-4のように半円形に近いものもある。またSX-1・3では墓壙の一端部をテラス（段）状に掘り残しているが、その意味はよくわからない。墓壙の両側壁がSX-5を除くと、ややふくらみ気味のものが多いことも特徴の一つにあげられよう。

これらの土壙墓は、他の縄文時代の土壙墓（配石墓）に例を見ない形態であると同時に規模も大きい。例えば京都市京人植物園内縄文遺跡の墓と考えられる配石I（後期）は直接50cm、深さ30cmの円形であり、東大阪市日下遺跡の土壙墓群（晩期）は、長さ1.2m前後の長方形もしくは橢円形に近い形態を有しており、大津市滋賀里遺跡の土壙墓群（晩期）も長さ1.0mの長方形を呈するものが一般的である。ただ、晩期の2例は屈葬であることも考慮すべきであろう。

配石 SX-2・3の埋土上半部で手人の跡を確認し、本来土坑上面に配されていた可能性が考えられる。複数の縄を土坑上面に配する配石墓は、近畿地方においては先述した京人植物園内縄文遺跡、および海南市溝ノ口遺跡（後期）などが知られている。

墓域の形成 先述したようにSX-1・2とSX-3・4は主軸をほぼ合わせて縱に並び、土壙墓の形成にあたって一定の規則性があったことを窺わせる。また、調査区の北西端部で旧地形の高まる部分の認められることは先に述べたが、各土壙墓ともその高まりに対して主軸を

沿わすようにして取り囲んで並んでおり、旧地形にも一定の制約を受けたことがわかる。他の遺跡の例においても、日下遺跡で同一円周上に上墳墓が並び、京大植物園内縄文遺跡では放射線状に配石墓が確認されているなど、規則性の認められるものがある。

以上のように近畿地方における縄文時代の墓の検出例はまだわずかであり、また、今回検出した土墳墓群の時期を断定するだけの資料に恵まれていない。ただ、墓壇上面の配石は、弥生時代には見られず、縄文時代後期に散見されることを重視するならば、今回の土墳墓群の時期も縄文時代の幅の中でおさえる方が妥当かもしれない。しかし、その一方で近畿の縄文時代の埋葬人骨例は、中期の姫路市辻井遺跡の例も含めて、その殆どが屈葬の形態をとっているのに対し、今回検出した上墳墓いずれもが、伸展葬も可能なだけの規模と形態を有していることはやや気になる。いずれにせよ、類例の増加を待ちたい。

なお、S X-1についても埋土の脂肪酸分析を行ない、土墳墓であるとの報告を受けた。しかし、土葬と断定するに至らなかったこと、あるいはS X-5が上墳墓であるとの結果が得られなかつたこともあわせて記しておく。

## 2. 縄文時代の千里川流域と野畠春日町遺跡

箕面市南部から豊中市北部に至る千里川流域では、最近縄文遺跡の発見が相次いでいる。まとめる以下諸例があげられる。

箕面山稻遺跡（前期）

豊中山野畠春日町遺跡（草創期・中期）

豊中山野畠遺跡（中期・後期）

豊中市柴原遺跡（晩期）

豊中市新免遺跡（早期・晩期）

この地域に縄文時代の遺跡が多いことは、言うまでもなく千里丘陵・千里川に生息する動植物に恵まれていたことによると考えてよいであろう。しかし、その一方で野畠遺跡・稻遺跡を除くと、各遺跡とも遺物の出土量はごくわずかであり、存続時間も短いと考えることは、決して安定した生活であったとは言えないことを示している。ただ、今回の調査で中期と思われる上墳墓群を検出したことは相対的にではあれ、安定した定住生活を送ることができる時期のあったこともしめしていると考えられる。全国的にみても集団墓が本格的に形成されるのは後期以降であるという現状をかんがえても、今回の土墳墓群は國府遺跡（前期）のそれとともに今後になげかける波紋は大きいであろう。

## 3. 弥生時代前期

今回の調査で、SK-7から少量の弥生I様式新段階の土器が出土し<sup>13)</sup>、野畠春日町遺跡が弥生時代前期の遺跡であることも明らかになった。元来、弥生時代前期の遺跡は沖積平野部に多

く、それは谷水田の開発にむかえなかった当時の技術水準に起因すると考えられている。豊中市域の他の弥生時代前期の遺跡としては、勝部遺跡<sup>10</sup>・小曾根遺跡<sup>11</sup>・山ノ上遺跡<sup>12</sup>が知られるが、それらも例外ではなく沖積平野かそれを臨む台地の縁辺部に立地している。そういうたった弥生時代前期の集落の一般的特徴から考えて、丘陵内の河岸段丘上に位置する野畠春日町遺跡は、非常に特異な存在と言えるであろう。先述した技術水準を考慮するならば、当時の野畠春日町集落は、土器こそ変化をとげたものの、縄文時代から引き続いて採集経済の段階にとどまっていた可能性も考えねばならない。なお、S X - 6・7は弥生時代前期の墓と考えられる。特に S X - 7 は三方に周溝を巡らし、出現したばかりの方形周溝墓の影響を受けた可能性も充分考えられる。しかし、子供の個人墓と考えられる点などは一般的な方形周溝墓とあり方を異にしており、短絡的に両者を結びつけることは危険であろう。

- 註 1) 『京都市理学部ノートバイオトロン実験装置室新宮工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』  
1974
- 2) 『日下遺跡発掘調査概要—第11・12次調査—』 東大阪市教育委員会1985.3
- 3) 『湖西線関係遺跡調査報告書』 湖西線関係遺跡調査団1973
- 4) 『海ノ口遺跡』 I 海南市教育委員会 海南市文化財調査研究会1984.3
- 5) 『兵庫県史』 第1巻1974
- 6) 1983年に北白川下層式の土器等が出土している。
- 7) 『野畠遺跡—第1次発掘調査報告—』 1981.6 豊中市教育委員会 『野畠遺跡—第2次発掘調査概報—』 野畠遺跡発掘調査団1986.3
- 8) 『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要1984年度』 豊中市教育委員会1985.3
- 9) 11次調査で晚期突帯文土器、石匙などが出土し、18次調査では早期の局部磨製異形石器が出土している。(『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要1986年度』 豊中市教育委員会1987.3)
- 10) 原本 強「経論」(『縄文文化の研究』 9 1983.8)
- 11) 『弥生式上器集成 本編2』 昭和43年
- 12) 『勝部遺跡』 豊中市教育委員会昭和47年3月
- 13) 第7次調査で遺物包含層を確認している。
- 14) 第3・6次調査でI様式中段階の溝・上坑を確認している。(『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要1985年度』 豊中市教育委員会1986.3)

#### 付記

1986年11月より今回の調査区の東100mで実施した第2次調査において、斜面に堆積した包含層中より縄文晚期突帯文土器と弥生時代前期(I様式新段階)の土器が混在して出土した。また、さらにその斜面下より新たに2基の土塙墓を検出した。それは、S X - 1等同様、第I類に含まれるもので、两者とも土坑上面に明確な配石が認められた。

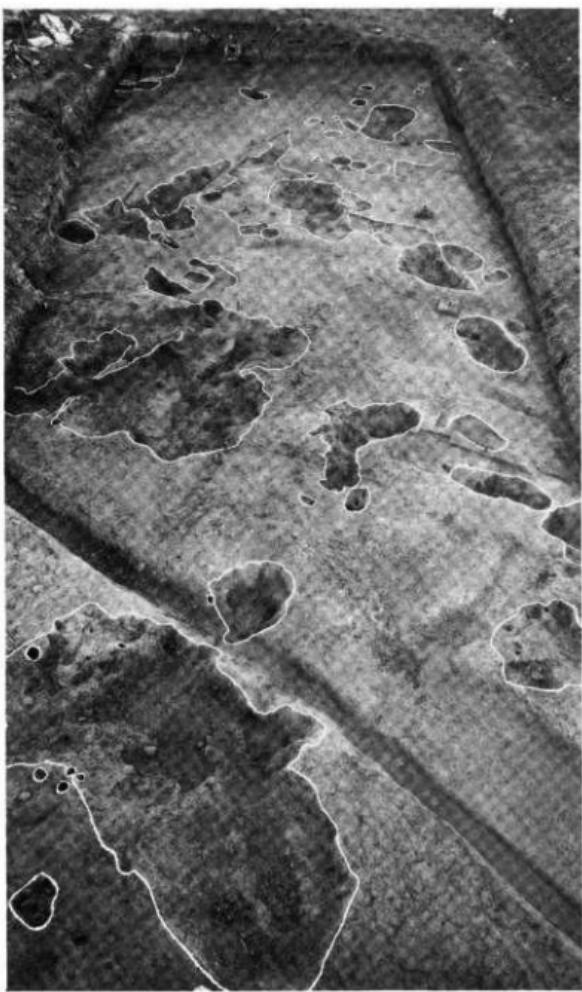
# 図 版



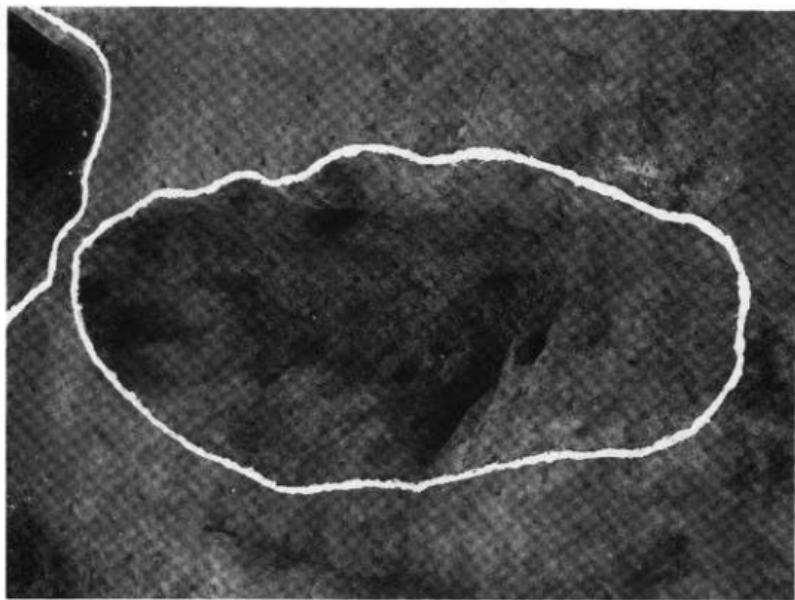
(1) 調査区遠景（東より 手前の森が千里川）



(2) 調査区全景



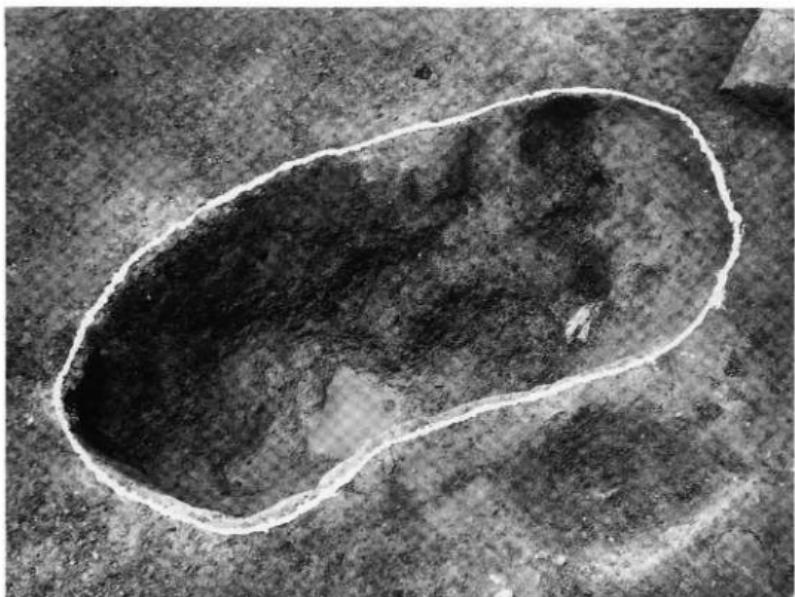
調査区全景(東より)



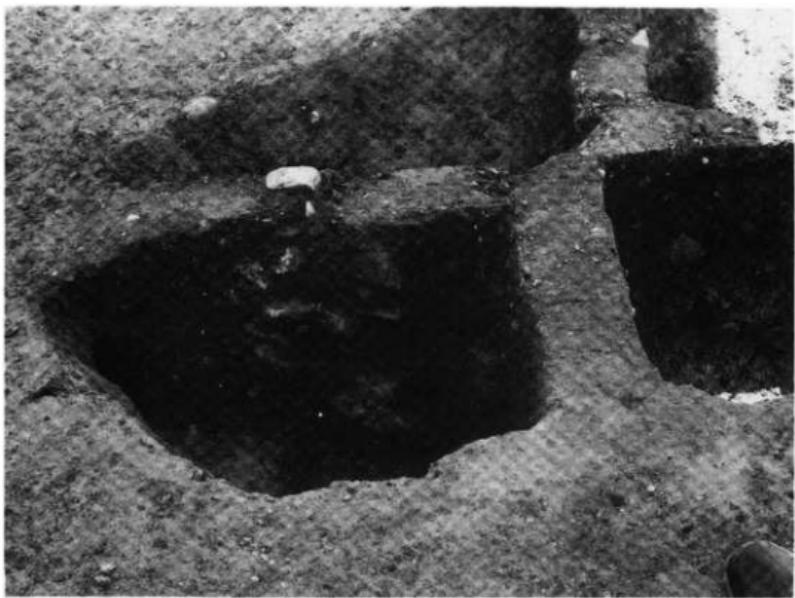
(1) SX-1 (南より)



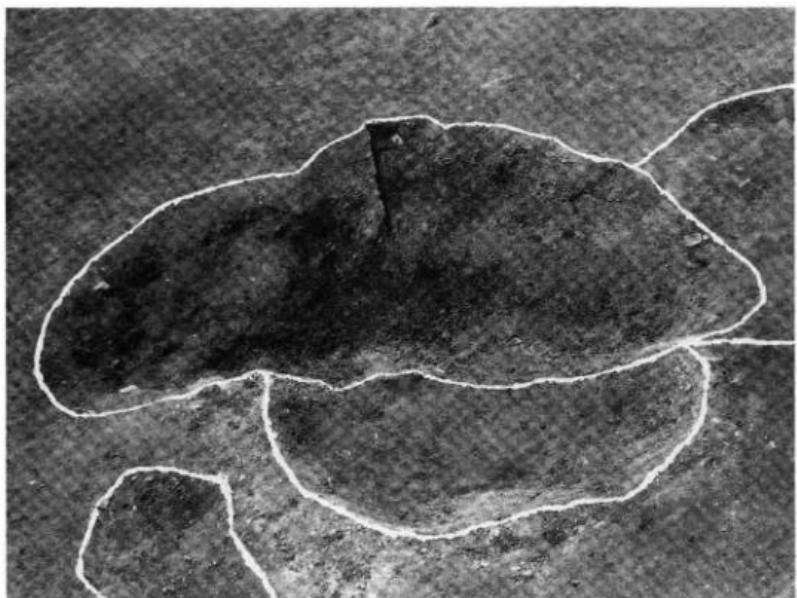
(2) SX-3 (東より)



(1) SX-3(北より)



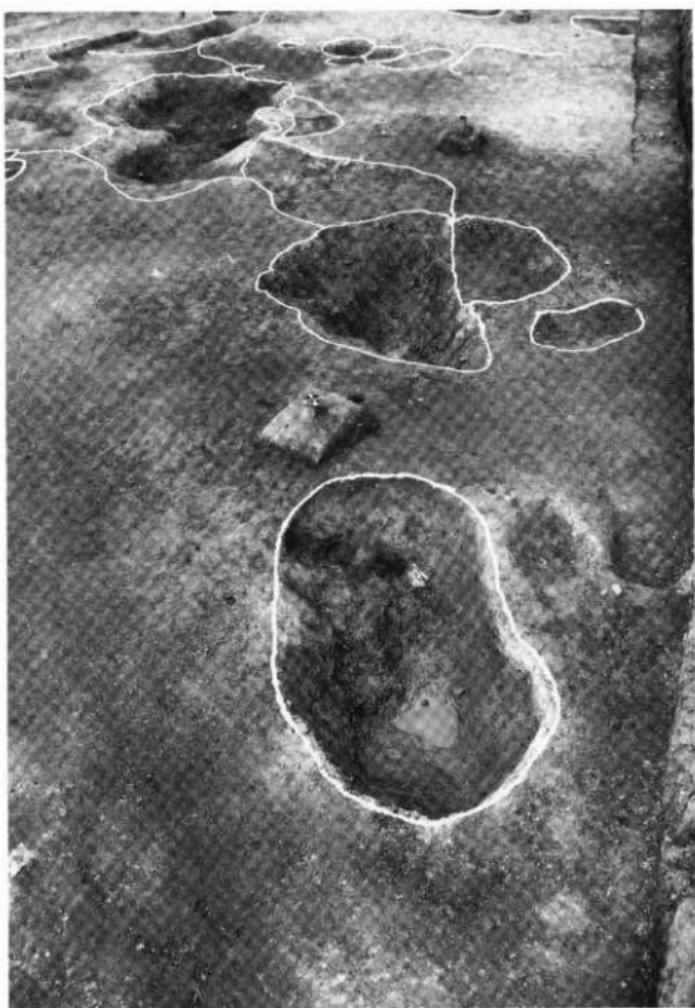
(2) SX-3 埋土壕出土状態(東端部)



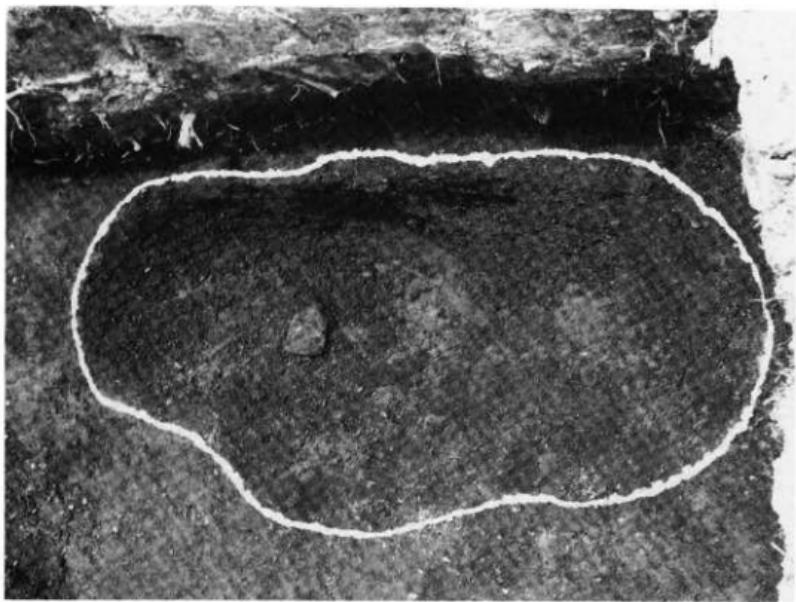
(1) SX-4 (北より)



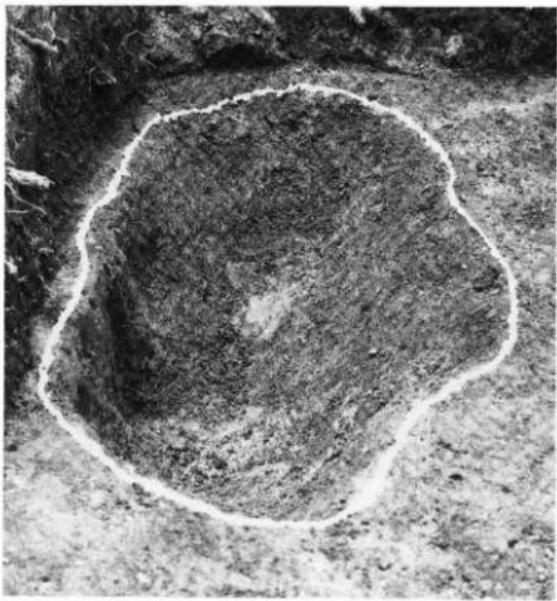
(2) SX-4 断面



SX-3・4 (東より)

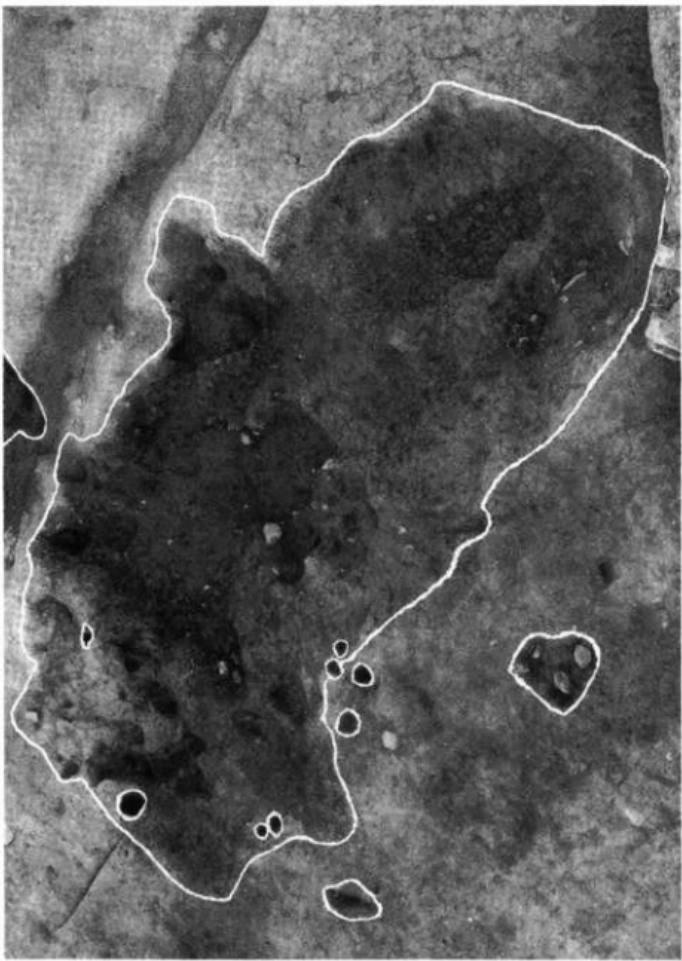


(1) SX-5 (西より)



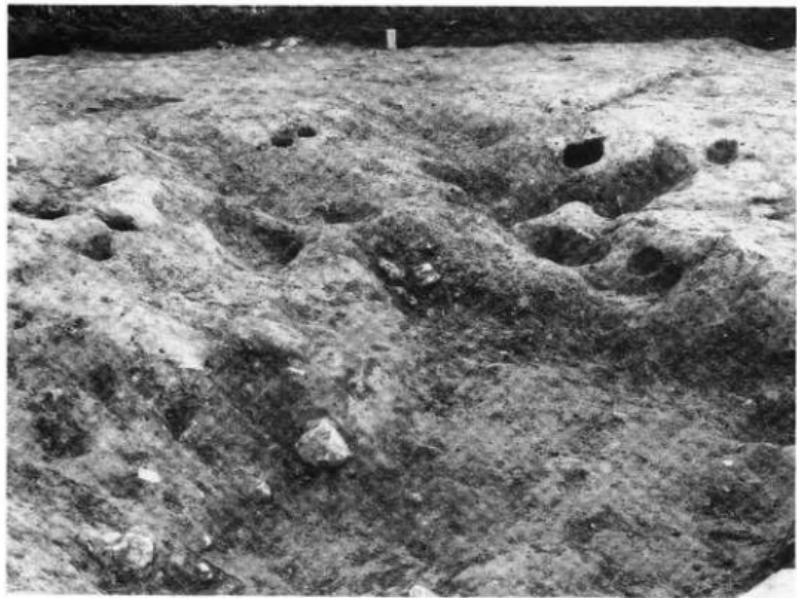
(2) SX-5 (東より)

SK-4・5 SP-1・2(東より)





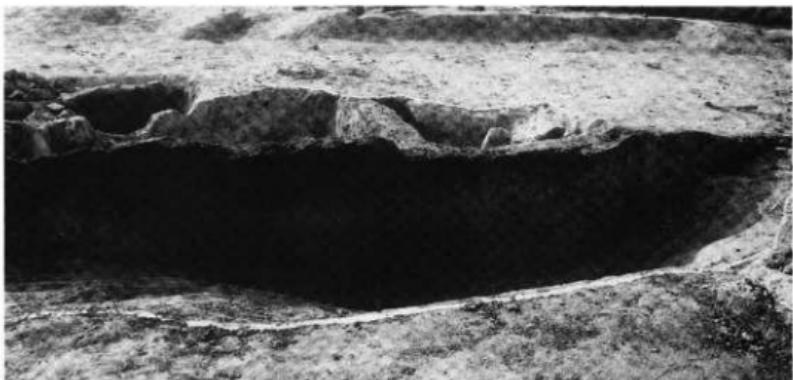
(1) SK-4・5 (北東より)



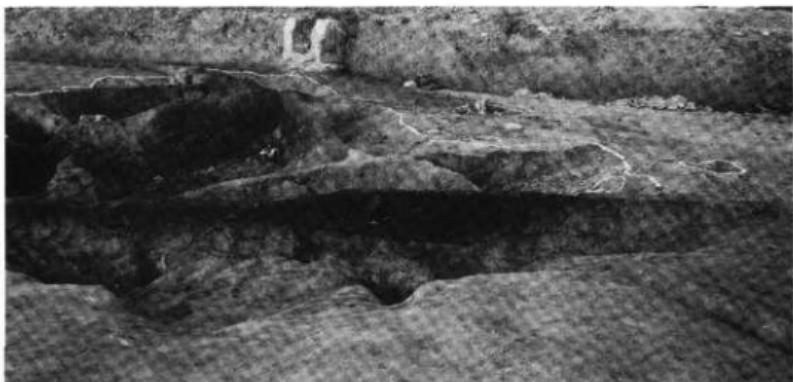
(2) SK-5



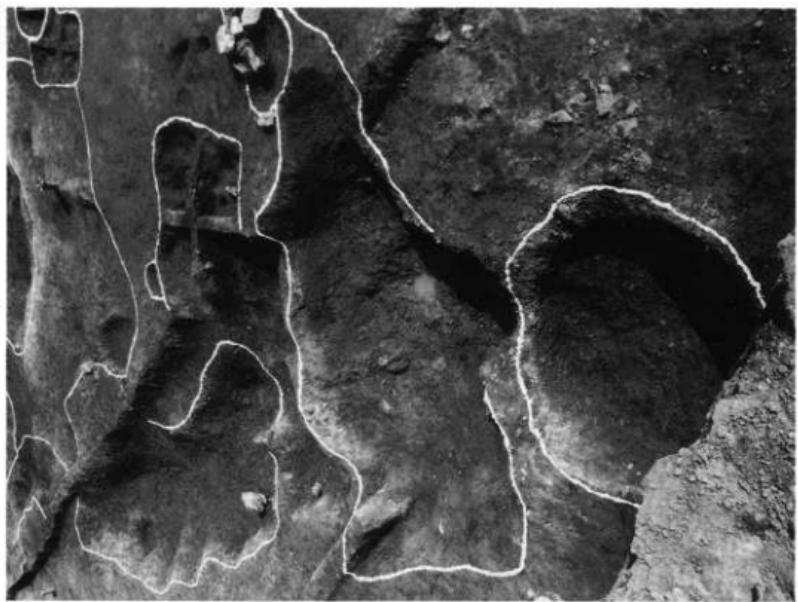
(1) SK-4 A-A'断面



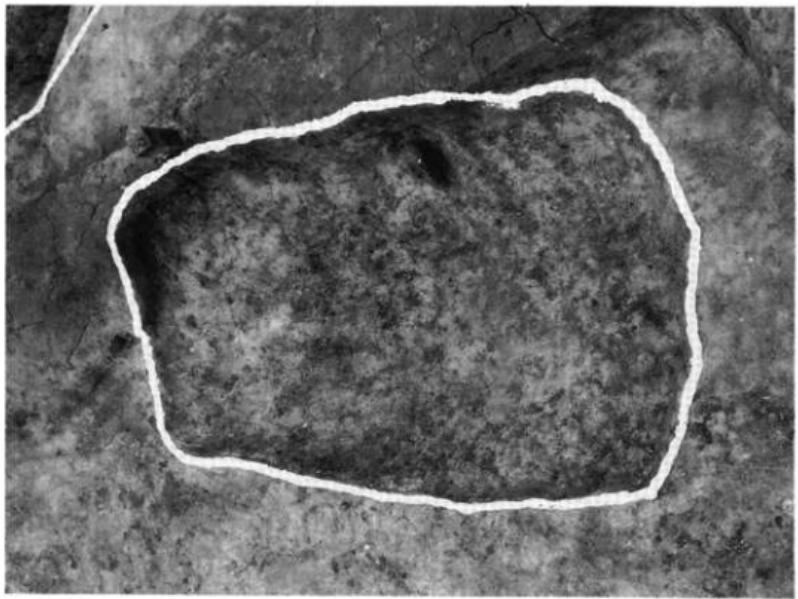
(2) SK-4 D-D'断面



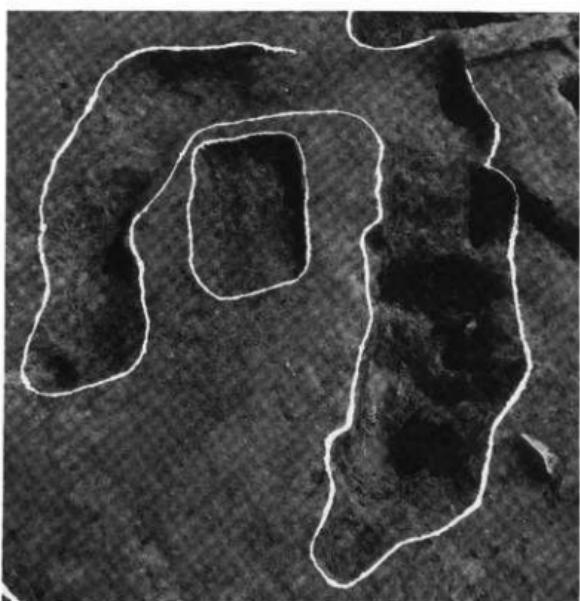
(3) SK-5 C-C'断面



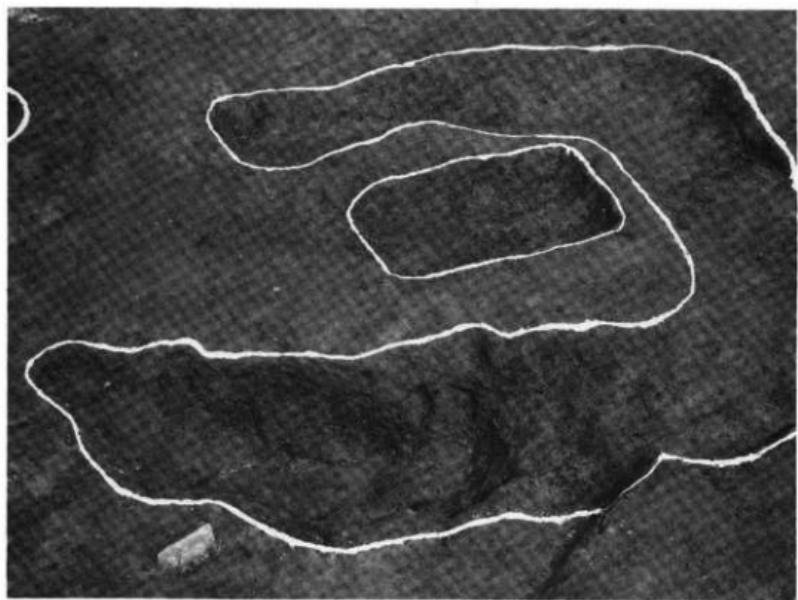
(1) SK-10~13(南東より)



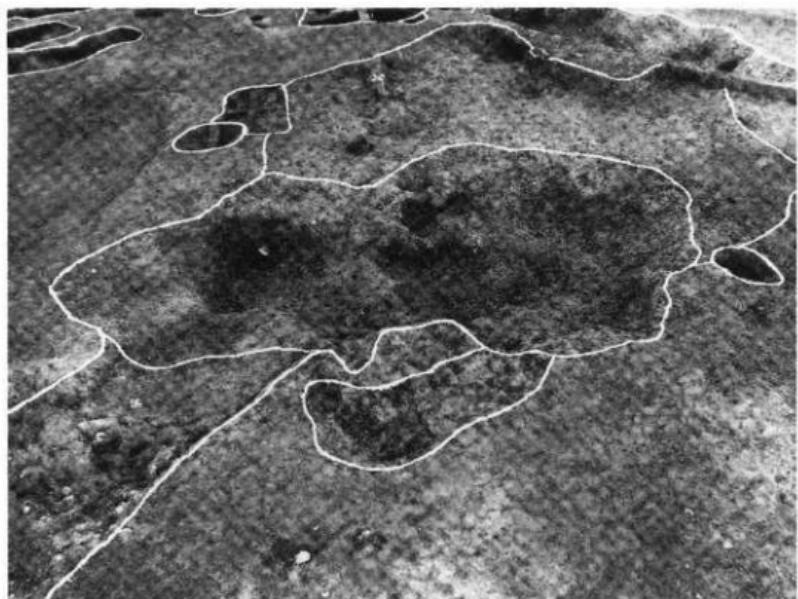
(2) SX-6(南西より)



(1) SX-7 (南西より)



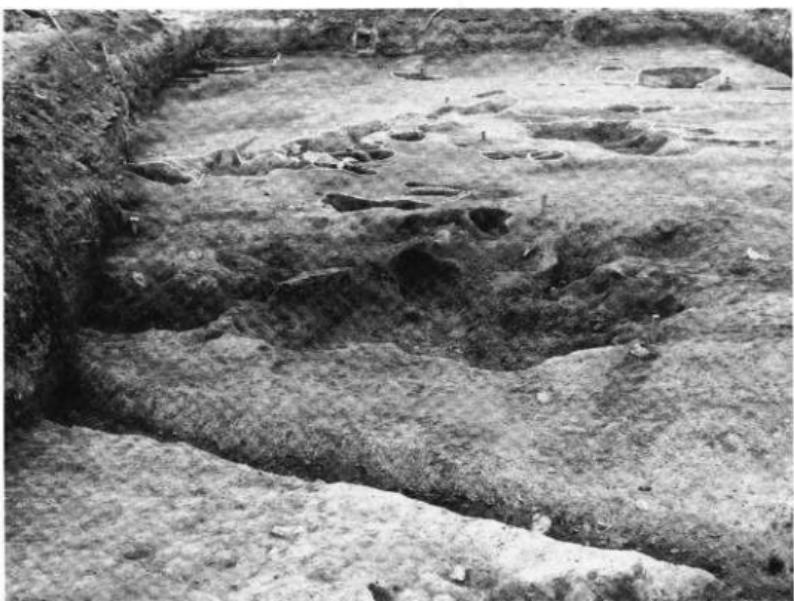
(2) SX-7 (南東より)



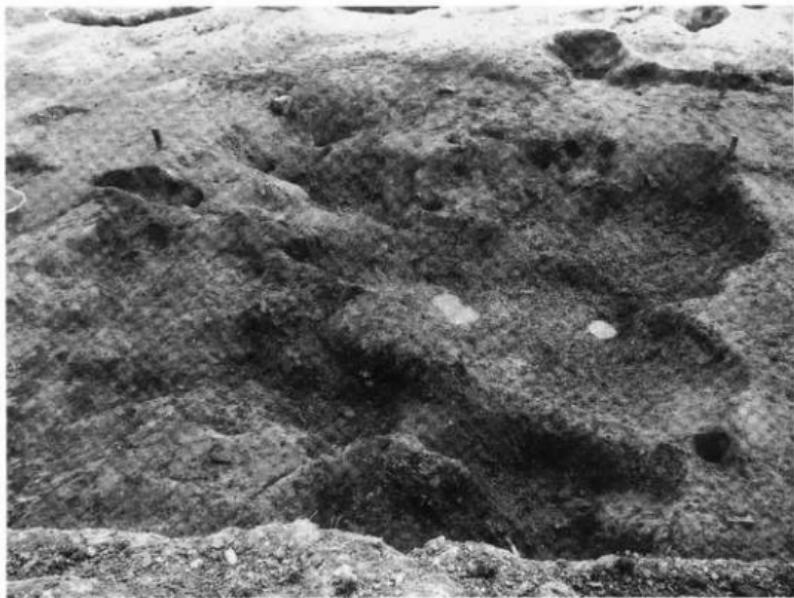
(1) SK-6 (北より)



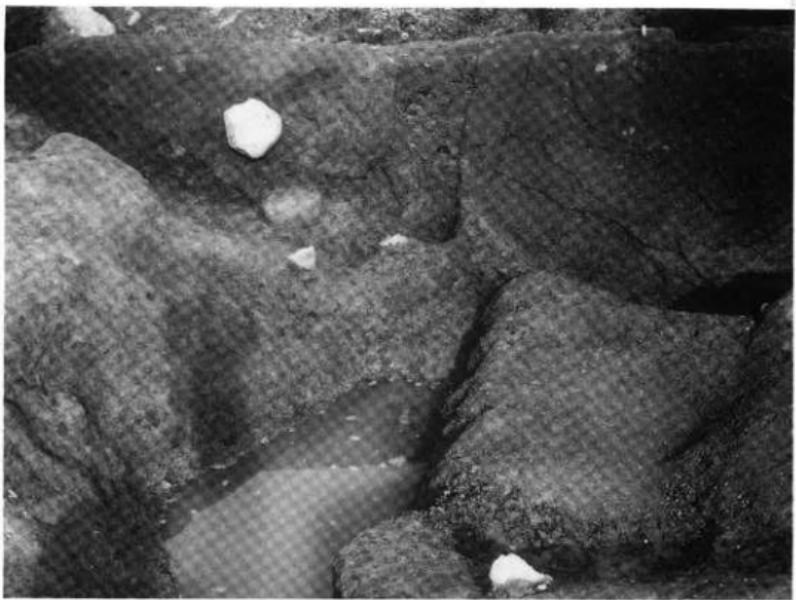
(2) SK-6 断面



(1) SK-7 (東より)



(2) SK-7 (南より)



(1) SK-7 断面



(2) SK-7 断面(北より)